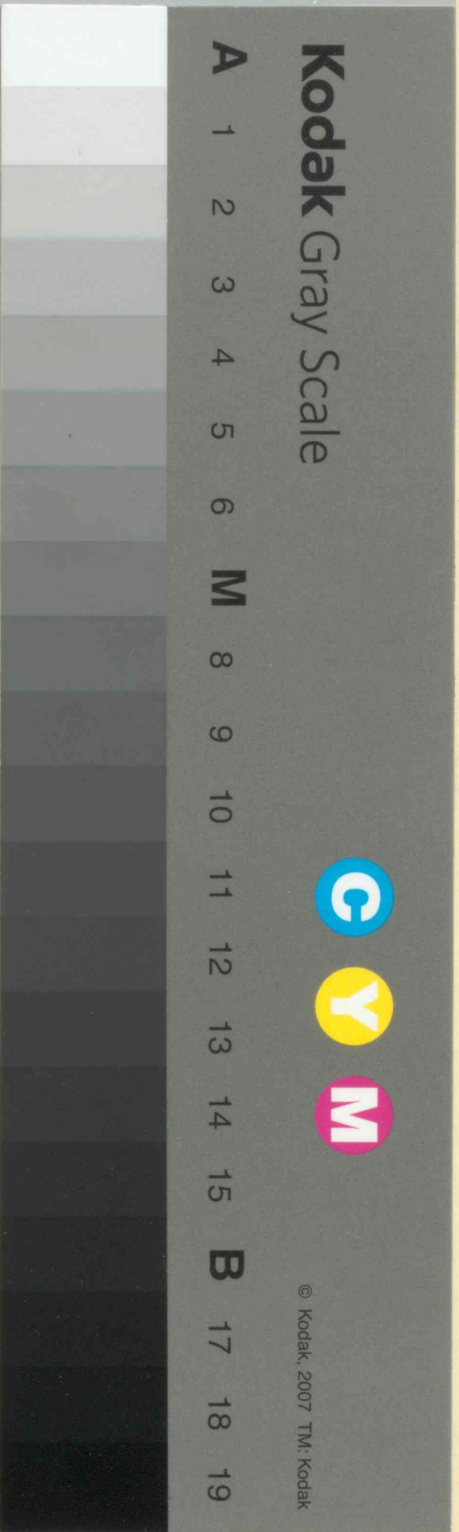


375.9
Y619
資料室



© Kodak, 2007 TM: Kodak

41758

教科書文庫

4
810
41-1934
20000 35765

5.9

1934



資料室

375.9
Y019

文部省檢定濟

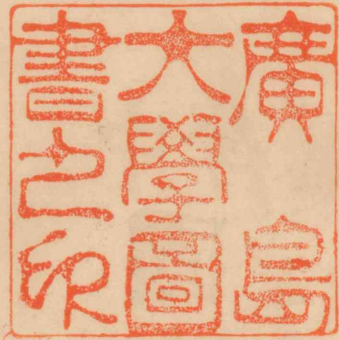
昭和九年十二月二十六日 中國語文教科用

吉田彌平編

中國文教科書 卷一

修正二十三版

東京 光風館藏版



例言

本書は中學校教授要目に據り、中學校國語科の講讀用教科書として編纂したものであります。

本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯とし、専ら生徒の學習能力を標準としてそれに適應するやうに組織しました。而して全卷を通じてその基調となつてゐるものは實に我が國文學を貫き流れる日本精神であります。

地圖・繪畫・寫眞などで本文の理會に必要なものは成るべく挿入しました。肖像や筆蹟なども賢哲名流の俤を偲ぶよすがになるものはつとめて取入れました。

本書の用字・假名遣・句讀點などは、つとめて國定小學讀本の例に準

據いたしました。
 諸家にはそれ〴〵諸家独自の文體あり、苟もこれに手を觸れてはならないことは申すまでもありませんが、本書の性質上まことに已むを得ざる場合に於て多少の手を加へることについて賜はりました諸家の雅懷に對しては、特に感謝の意を表する次第であります。

昭和九年七月

中國文教科書 卷一

目次

一 聖徳……………	石井國次	二
二 日の本……………	……………	二
三 田家の朝……………	相馬御風	三
四 親子の馬……………	吉植庄亮	五
五 瑞竹の林……………	……………	七
六 三つの肉弾……………	小笠原長生	五
七 東洋理想の歌……………	土岐善麿	五

八	雞	薄田泣菫	四
九	菖蒲の節供	島崎藤村	五
一〇	花の若武者	岡谷繁實	六
一一	湖山長者	五十嵐力	七
一二	泉の三郎	柳澤淇園	七
一三	比叡 <small>ハイレン</small> の鳥	高濱虚子	七
一四	兜蟲	吉村冬彦	八
一五	橘中佐 <small>(原漢文)</small>	土屋鳳洲	八
一六	九十九里濱	徳富健次郎	八
一七	富士登山	萩原井泉水	九
一八	脛	三木露風	二八

一九	二兒	大町桂月	一〇
二〇	花火	岡本綺堂	一三
二一	水の都	大類 伸	一三
二二	ベッカストリニ	松村武雄	一七
二三	専心	萩野由之	一五
二四	安井息軒	森下鷗外	一五
二五	垣巡り	夏目漱石	一六
二六	スポーツマン	辰野保	一七
二七	八幡太郎 <small>(原漢文)</small>	頼山陽	一七
二八	恵まれた國土	清原貞雄	一八

二八 憲法の大體 新編

二九 大體の概観 新編

三〇 大體の概観 新編

三一 大體の概観 新編

三二 大體の概観 新編

三三 大體の概観 新編

三四 大體の概観 新編

三五 大體の概観 新編

三六 大體の概観 新編

三七 大體の概観 新編

三八 大體の概観 新編

三九 大體の概観 新編

四〇 大體の概観 新編



中國文教科書 卷一

石井國次

教育家

學習院名譽教授

宮中顧問官

明治七年(三五三)

茨城縣生

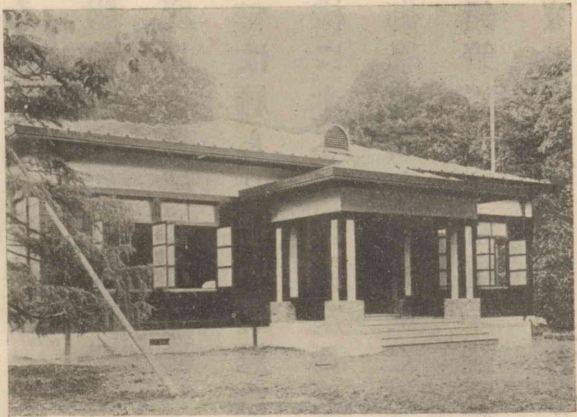
今上天皇陛下には允文允武におはしまして萬民の上に君
 臨せさせ給ふべき聖徳を生れながらにおそなへ遊ばして
 いらせられます。私は恐ながら今ここに陛下が御幼少の
 みぎり、學習院御在學中の御事どもを申し上げまして、聖徳
 の一斑を仰ぎ奉りたいと存じます。長年以來、この御事ども
 まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられること

三寶
佛法僧
聖徳太子の憲法
の第二條に「篤
ク三寶ヲ敬ヘ」
とある

篤

とであります。私は今まで多くの學生に接して参りましたが、陛下のやうに記憶の強い方は見受けたことがありません。蟲の名でも、貝の名でも、聯絡も系統も無いことまで、一度お覚えになつた以上は、決してお忘れになるといふことはありません。かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもいゝ加減にして置かれることがお嫌で、詳細に御質問になり、又御自身徹底的に御研究になるのであります。例へば歴史で聖徳太子の御事蹟を申し上げますとお歸りになつて参考書をお調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、^{サガ}三寶とはどういふことかと御研究になる。理科で蝶のお

話を申し上げますと、蝶類圖説をお調べになつたり、盛に御採



生 物 學 御 研 究 所

集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。電氣のお話を申し上げますれば、種々の器械をお取寄せになつて御實驗遊ばされ、無線電信電話の事まですつかり御理解になるといふ風であります。旅行登山の御趣味も御豊富にあらせられ、單なる御運動としての外に、^毎地圖や案内記をよくお調べになり、その産物や動物、礦物から氣象のことまで熱心に

御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識の確實で且深みのあらせられることは、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に参拜して、明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀した者は、誰でもその御質素なのに感泣しないでは居られないと思ひますが、陛下もまた明治天皇と御同様に、すべて華美なことがお嫌であらせられます。例へば御學用品なども、全く一般學生と同様な品を御使用になり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使用になりました。しかもそれがごく短くなるまで決してお棄てになりません。消ゴムも當時四五錢ほどのものを、豆粒位に

明治神宮
官幣大社
東京市澁谷區代
代木に鎮座
祭神は明治天皇
並に昭憲皇太后

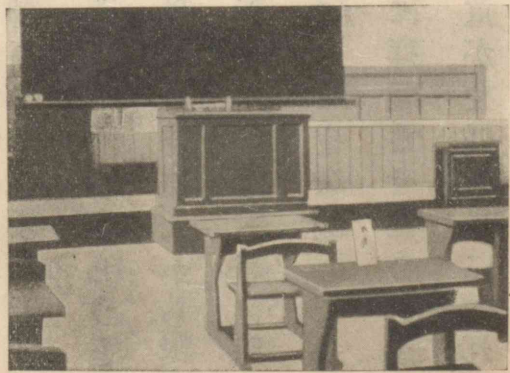
なるまで御使用になり、雜記帳でも、半紙や畫用紙でも少しもむだには遊ばしませんでした。それで、大正三年三月初等科を御卒業あらせられました時、御高德を一般兒童に拜せしめたならば、國民教育に裨益する所があるだらうと考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から帳面、鉛筆、消ゴム、並に御製作になつた手工品、圖畫、標本等を拜借して一室に陳列し、御教室、御控室等すべてを公開して、一週間に互り、市内及び近縣の小學兒童に拜觀させたことがあります。その時、毎日何千といふ兒童が校長、教員につれられて参り、私どもは手分をして種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女

リボン
Ribbon

の子でかなり綺麗な服装をして幅の広いリボンなどをつけて来た一組がありました。私とその女生徒たちに説明をしてから、皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの、幅の広いリボンだのを家庭でおねだりが出来ないでせうね」と申したら、たいそう感動して泣いた生徒が随分ありました。

陛下は又非常に規則正しいことがおすきであらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入浴、御寢まで、實に規則正しい一日の御日課をお守りになつて、御變更になることは容易にありませんでした。随つて何事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。

陛下は又實に公平無私であらせられます。例へば、戦争ごつこをやつたあとで、私とその審判や講評などを致します時、御自分の方に不利なことがお有りになつても、少しもお包みなくお申出になる。角力で、陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣づかなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です」と御主張になる。審判者や行司が少しでも



機御の用使御で院習學

浴、御寢まで、實に規則正しい一日の御日課をお守りになつて、御變更になることは容易にありませんでした。随つて何事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。

陛下は又實に公平無私であらせられます。例へば、戦争ごつこをやつたあとで、私とその審判や講評などを致します時、御自分の方に不利なことがお有りになつても、少しもお包みなくお申出になる。角力で、陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣づかなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です」と御主張になる。審判者や行司が少しでも

不公平な判定をすると、非常にお嫌ひになる。仲間の者が、「それでお宜しいではございませんか。」などと申し上げると、「そんな不正直なことはいけない。」と仰せられる。随つて、歴史上の事柄を御批判遊ばされる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隠れるところはないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い、どちらかと申せば御口數の少い方で、餘分のことには仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。随つて御幼少の時分から、普通の子供に有

りがちな、友達にからかふとか、意地悪いことをするとかいふやうなことは決してお有りになりませんでした。そして御學友に對しても、お側の者に對しても、全く好き嫌ひといふことがなく、一視同仁で、公平にお愛しになります。侍従や侍従武官などにも、少しも新舊の差別なしにお接しになると承ります。しかも舊い人をいつまでもお忘れにならずに、元の侍女や御學友などがお伺ひ申しますと、大層お喜びになりますし、時々のお召もあります。私どもにもやはりその通りで、御誕辰その他のお祝のをりにはお召があら、御機嫌伺に出ますれば、特別に拜謁を許され、御都合のお宜しい時は、お引止めになつてお言葉を賜ふのであります。

先年 大正十年
ロンドン
Paris y London

先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリでお迎へ申し上げましたが、屢お召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられますので、覚えす無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだんく荒んで、師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年學生の多い今日、陛下のかやうな御態度は、實に貴い御模範ではありますまいか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無いお方で、現つ神としての神々しい御性格を先天的にお具へあそばしていらせられると申し奉るほかはありません。(教育研究)

二日の本

よみ人知らず

筑波根のこのもかのもにかげはあれど君がみかげに
ますかげはなし

源 實 朝

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあら
めやも

後醍醐天皇御製

あはれとはなれも見らむわが民をおもふ心は今も

源 實 朝
鎌倉第三代の將
軍
承久元年(八七九)
薨
年二十八
後醍醐天皇
第九十六代
御諱は尊治
延元四年(八九九)
崩
壽五十二

佐久良東雄

勤王家

常陸の人

萬延元年(二五〇)

卒

年五十

贈從四位

かはらず

佐久良東雄

朝日影とよさかのぼる日の本のやまとの國の春のあ

けぼの

八田知紀

いくそたびかきにごしても澄みかへる水や御國のす

がたなるらむ

八田知紀
歌人
鹿兒島の人
明治六年(二五三)
卒
年七十五
贈從五位

三 田家の朝

相馬御風

笥をおちる水の音を聴きながら、いつとはなしに深い眠に沈んでゆく——さうした田家の夜の静けさも懐かしいが、

それ以上に、私は朝の寐覺に笥の水の音を聴くすがくしさを好む。

笥の水の音は、田家の夜と朝とを詩味あらしめる爲には、な

くてはならぬ要

笥 素のやうに私は

の 清 思つてゐる。そ

水 筆 方は 僅かに細い

一本の竹筒の口

を漏れる水の音でしかないが、しかも、何といふ大きな魅力

をそのうちに藏してゐることであらう。それが一家の者

の生命をつないでゆく上になくはならぬ貴いものであ



ることは言ふまでもないが、それを外にしても、私たちには、山の水を取入れる爲の笥を持つた田家の詩味が、たまらなく懐かしくも又羨ましくも思はずにはゐられない。朝の寐覺に我知らず耳を傾ける笥の水の音のすがくしさ。それが笥を落ちるのでなくて、直に山腹の岩間からことと流れ出る泉であれば、その音のすがくしさには神祕な味はひさへも加はつて、私たちの心に一層貴い静けさを與へてくれる。

水の音を聴きながら眠り、水の音を聴きながら目覺めた刹那の心の静けさは、田家に住む人々に與へられた大自然の最も大きな恩惠の一つである。

私は嘗て或山奥の一軒家にとめてもらつたことがあつた。その時もやはり、私の寢てゐる枕に近く笥の落ちる水の音がしてゐた。安らかな眠から覺めたばかりの私の耳に、その水の音は、おのづと爽かな響を傳へた。私は何といつて見やうもないすがくしさと、静けさと、安らかさとに心身を抱かれながら、その水の音に聴きほれてゐた。

部屋の中はまだ暗かつた。しかし私は、それが眞夜中であるか、朝であるかといふことさへも考へなかつた。私はただうつとりと、やすらかな寐覺のこゝろよさにひたつてゐた。

その時ふと、私はどこからともなく響いてくる鈴の音を聞いた。そして、それが馬の頸に下げられた昔ながらのあの鈴の音であることを、私はすぐにたしかめることが出来た。

じやらんくくく……

鈴の音は段々近づいて来た。

それにつれて、ばつたんくと

いふ藁の杓をはいた馬の足音

も刻々に近く聞かれるのであ

つた。

その馬の鈴の音と足音とが、はじめて私に朝を感じさせた。

「あ、もう草刈に行く人がある。夜が明けたんだな。」



朝 草
山口華揚筆

さう思ふと同時に、私は起きあがつて、雨戸を明けにかゝつた。

あの時のすがくくしかつた氣持を、今でも私は忘れることが出来ない。

田家に住む人々は、いづれも早起である。若い人たちは、日の出る前にもう山の草刈から戻つて来る。老人たちの朝飯前の仕事は、藁打と草鞋づくりとである。

とんくくく……

朝まだ暗いうちから、藁を打つ槌の音があちらでもこちらでもする。たまには、その音を拍子にして唄をうたつてゐ

る人もある。鶏舎では鶏が盛に鳴いてゐる。山家に泊つて、早朝谷川へ顔を洗ひに行く氣持も、私にはたまらなく懐かしい。清流に口をすゝぎ、顔を洗ひ、頭をひやすことの快さはいふまでもないが、私はそれ以上に、清流に口をつけてすぐに流を飲むことの快さを愛する。草の上に、又は岩の上に寝そべり、顔を清流の上に差出して流に口づける。水は容易に口の中にはいらぬものであるが、しかし、さうして飲む水の味と、手や何かで掬つて飲む

水の味とは、まるで違つてゐるやうな氣がする。「流を飲む」さうした氣持だけでも既に嬉しいものである。手で掬ひあげた水に曉の空の光の映つた感じもいゝ。

(郷土に語る)

四 親子の馬

吉植庄亮

馬はまことにかはいゝ動物である。まだ開墾を始めない頃から、私の家には牝馬が一匹ゐた。三里塚の御料牧場から拂ひ下げて來たもので、えらい血統書のついた、まあ素性卑しからざる馬族に屬してゐた。その子の吉野號は、私の家の厩で生れたが、その父の牝馬はこれも御料牧場で、母の

吉植庄亮
歌人で農業を営む
明治十七年(西)
〇千葉縣生
三里塚
千葉縣印旛郡遠
山村の内
宮内省御料牧場
がある
櫻の名所

牝馬よりは更に一段と高貴なる血族に屬してゐた。

その爲か、この仔馬は生れるとから、すつかり貴族的な風貌をしてゐて、わけてもその額白の

聰明な顔つきは白秋君・夕暮君、亡

くなつた千櫨君等、よく遊びに來

た歌人たちにかはいがられたも

のだつた。私の家ではこの親子

の馬を、すつかり家族的に取扱つ

てゐた。彼等は自分たちの欲す

るまゝに、いつも前埜・南埜・大埜に、

豊なる草より草に、その食慾を満たし、食ひあきてはよく家



三里塚牧場

の下道に出て遊んでゐた。

◎ 村人ら家のかどべにも、のまをす言葉をきけば馬にまを

せり

こんな歌が私にあるやうに、私が誰かに言葉をかけられて

ゐるのだと思つて、夕まぐれなど「やあ」と返辭をして、かどの

方を見ると、その人は親子の馬にだけ話をして、もうすたす

たと走つて、高草のなかに影を隠してゐた。こんなことが

よくあつたものだ。

出たいときは野に庭に、居たいときは厩にといつた風に出

入とも自由にさせてゐた。で、夏の夜などは蚊の群から遁

れる爲に、厩から外に始終出てゐた。私はよく夢の中にま

で、しばし、憂々と庭石を踏通る彼等の足音を聞いた。そして人懐かしがりやの彼等は、夜手水に起きた私に、しばしば、眞暗闇のなかから、その長い、顔をすりつけて、一度は本當にびつくりさせた。そしてその後からたまらなくかはいくさせたものである。ある朝皆が元氣よく朝飯の膳について、朗かな笑に崩れてゐた時の事である。障子の外に黙つて、この祝福せられた朝餐の終るを待つてゐた私の二人の友だちは、とうとう待ちくたびれてか、突然にゆうつと、その長い、顔を食卓の上に突きだしたものである。私たちは本當にびつくりした。そしてすぐ後から又たまらなくかはいくなつてしまつたのである。

ある夕方の事、女中がけた、ましく叫ぶので、皆臺所の方に駈けつけて見ると、なんと、私のこの二人の友だちは、お腹が減つたと見えて、板敷の上に上りこみ、飯櫃の中からちかに御飯を食べてゐたのである。

またある夕方の事である、薄暗くなつた土間で、女中がしきりに大聲を揚げてゐるので、のぞいて見ると、なんと、私のこの二人の友だちが、また夕御飯の御馳走に與らうと忍び込んだ所を、今度は見事女中に見つかつて叱られてゐるのである。ところで、私の友だちは、神妙にその小言を聞き、首を垂れ流し目に私を見上げて、詫をしてくれといふのである。

いや確にさう言つてゐる、それは本當にかはいらしい目であつた。

ある日の夕方、友だちが東京から来て、湯上りの卓に麥酒を酌み、興まさに酣といつた頃、わが額白の長面貴公子は突然座敷に上りこんで、如何にも面白いなといつた顔つきで私たちを眺めてゐる。「ほい」と聲をかけて追ふと、座敷の上で跳躍ダンスを始めて、なか／＼おりようとはしない。自分ひとりを仲間外れにするのはけしからぬといふのである。誰がつて、この仔馬が、その眼で私に確に言つたのです。ある月明の宵の事である、いままでそこにゐた親子の馬が突然に姿を隠したので、いつも行つてゐる限りの場所を捜

したのであるが、見つからない。尋ね、尋ねて、笛の音が唳々と聞える、原中の吉兵衛さんの近處まで来て、笛の面白さに立寄つて見ると、わが長面貴公子は、とうから母堂諸共こゝに御出座になつて、首を長くし眼を細くして、人間の音楽にたんのうしてゐたのである。またある日の事である、蠅がうるさいので、蚊帳の中で善い心持に晝寢をして、凡そどの位寝たか、ふと眼を開くと、私の身體の上には大きな物の感覺が、重さで



馬

ない重さとなつて加はつてゐるのにびつくりした。何と、私の友だちであり、家族であるこの長面貴公子が、のつそりと座敷に上つて来て、私を蚊帳の外から眺めてゐるではないか。下からつくつくと見上げた馬のお腹の大きかつたこと、顔の上でした馬の鼻笛の強かつたこと、いまだに身に沁みて忘れられない。

これはまだ開墾に着手しない頃の話である。朝遅く床の中で眼がさめる、家中の人が野に出た後のひつそりかんとした眼覺である。枕をあげた眼にはいるのは、疊の上に圓くいくつも凹んで残つてゐる馬の足跡である。人間が一

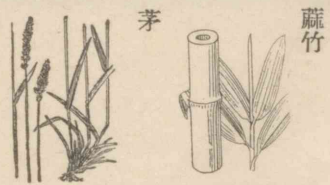
人寝てゐる朝の座敷で、一踊り踊つて、野原に出かけたなあ——さう思つて、ひやりとして、私は思はずも頭をかゝへたものである。

私の開墾も足掛八年になる。この仔馬も血氣盛の年頃となつて、かつては遊び暮した野を耕しつゝ、夜は既に繋がれてゐる。(新潮)

五 瑞竹の林

屏東にある臺灣製糖株式會社の庭には、みづくしい瑞竹の林があります。それがかく繁茂するに至つた由來には、世にも有難く尊い話が織込まれてゐるのです。

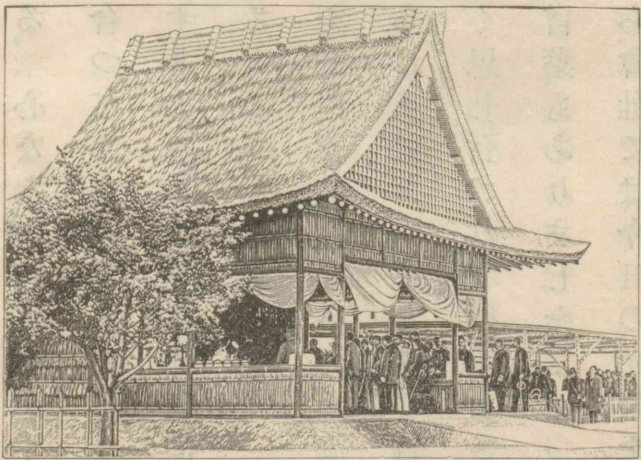
屏東
臺灣高雄州屏東
街



今上天皇陛下がまだ東宮におはしまして攝政でいらせられた頃時は大正十二年四月臺灣へ行啓あらせらるゝ旨仰出サシテがありました。これを承つた全島の同胞は歡喜に堪へず、その輝かしい日を足つまだてて待つてゐました。まして、南方僻遠キョウエンの地にある臺灣製糖株式會社では、畏くも行啓の内命を拜して、社長以下従業員一同は、思ひもかけぬ有難き思召に感激し、奉迎ホウコウの準備に至誠をさゝげていろいと心を碎きました。

まづ御休憩所として、綠色濃き臺灣特産の蕨竹ワケタケを柱とし、茅カヤで葺いた清楚な小亭ショウコウを造營することにしました。早速、臺中州の竹山に人を遣はして、竹を伐出キリさせ、色の損ぜぬやう

に菰ヒメで包み、注意に注意を加へて廻送させ、謹んで建築に着手しました。たま〜宮中の御都合で、行啓の御日程スエが變更になりましたので、竹の柱には十分手當を加へましたが、日がたつまゝに、緑の色はあせて、光澤がだん〜悪くなつて行きました。これはと案じて居りますと、愈、行啓の數日前になつて、不思議や、竹の柱の節のところどころから、新芽が出て來ました。伐採ハツク後四十日も近



御休憩所に於ける攝政殿下

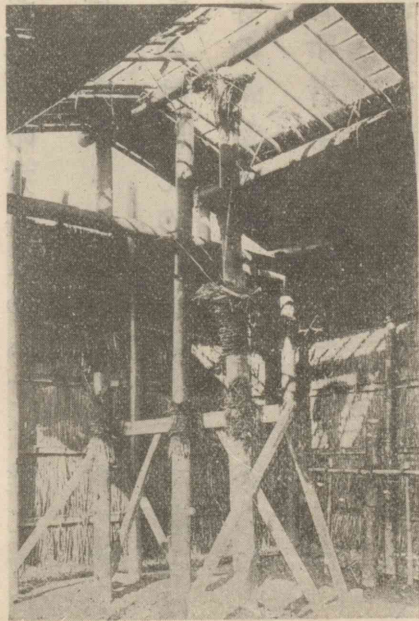
い竹から、かうして芽が出るといふのは全く例のない事なので、これぞまさしく瑞祥スズキヨウである。心なきものにもかく感應があるかと、見る人毎に語り合つてゐました。

いよく、行啓の當日になりますと、その芽は既に伸び伸びて、五六糎から十二三糎に達するものさへありました。攝政殿下には親しく工場農場等を御巡覽あらせられた後、やがて新築の御休憩所に入らせられました。ふと件の竹の芽にお目がとまり、いと興味深く思し召されて、御手をさへ觸れさせられ、種々御下問の御言葉もありました。

さて殿下の還啓を奉送してから、會社では今日の光榮を、一は臺灣糖業の爲、一は會社の爲に永遠に記念する方法について協議致しました。その時、第一に、さうして異口同音に唱へられたのが、この瑞祥を育てあげて、竹林に仕立てようといふことでした。だが、その方法については誰にも自信がありません。意見はまち／＼で、蘆竹の芽が育つだらうか、伐つた竹が芽ぐむのは、ほんの一時で、やがて萎しみはしまいか。要するに、我等の希望が一つの空想に終らねばよいが、などと、歎聲を洩らす者も多くありました。

「百の評定も一の實行に如かず。ともかくも最善を盡くしてやつて見ようではないか」といふことに衆議が一決しました。すぐと竹の栽培に精通した人を竹山から招いて、様様に手を加へさせましたが、その人は數日の後、到底私ども

の手に合ひません」といつて、辭して歸りました。「このま
ま手を束ねて見ては居られない。よし栽培法は知らずと
も、誠心こめてこの若芽ワカメを育て上げずにおかうか」とは、すべ
ての者の意氣込でし
た。そこで柱カサを覆う
て、日光を避け、芽の所
を蓆ヒシロで包み、その中に
土を盛つて、朝夕水を
與へました。



芽の柱竹の中養培

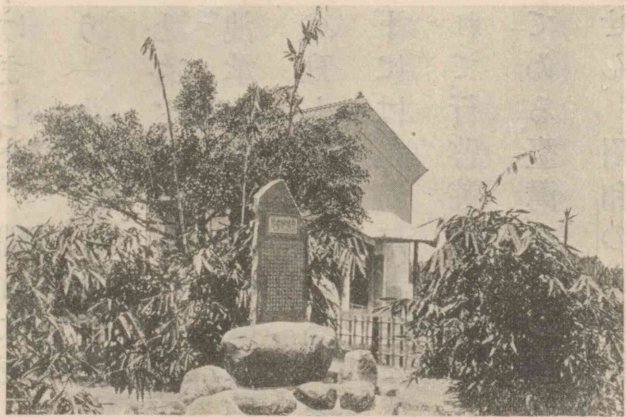
芽は日にくく伸びて、七八十糎に達しました。一同の喜と
いつたら譬へやうもありません。ある日、芽の上下適當な

所で竹を切離し、御休憩所の柱の跡、九箇所にこれを植込み

ました。

一同の至誠は遂に天に通じて、竹
は日ましに茂つていきました。
九株が九株とも、健全に育つてい
きました。さうして、やがてどの
株からも續々と若竹が出て來ま
した。

これを見た一同は、心から嬉しく、
「竹の園生ノノの御榮もかくこそ」と御
祝ひ申し上げ、この度の行啓とこの瑞祥とを記念する爲に、



館念記び及碑念記啓行

竹の園生
親王又は皇子の
稱
支那の梁の孝王
といふ王子が竹
園に居つた故事
から出た語

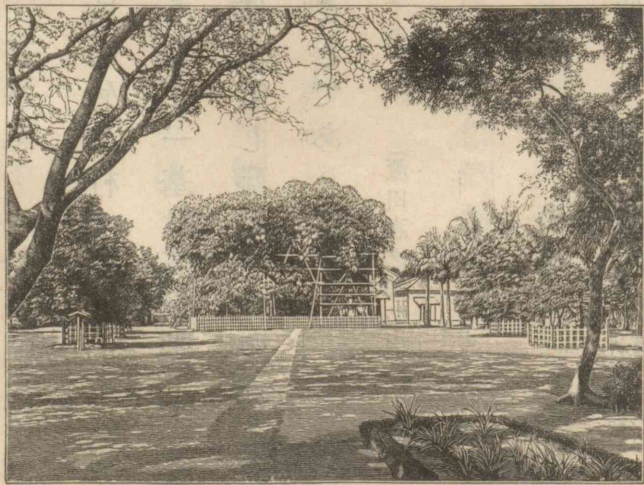
碑を御休憩所の跡に建てて、その謂はれを文にして彫りつけました。瑞竹は茂りに茂つて、やがて碑を覆ひ、今ではもう一大叢林となりました。これ偏に殿下御高德の致す所と存じます。

洩承る所によれば、行啓のみぎり、御供の人々が、屏東は暑さの烈しい處でございませうとお氣遣ひ申し上げますと、殿下には「いかに暑くとも、人の働いてゐる處ならば」と仰せられて、行啓遊ばされましたとか。この御一言で、熱帯に働いてゐる臺灣在住の同胞たちが、どれほど感激したか知れません。昭和の大御代になつて、遠く行啓の日を思ふと、感殊に深きものがあります。「人の働いてゐる處ならば」と仰せ

入江子爵
入江爲守
皇太后宮大夫
御歌所長
子爵
京都の人
明治元年(三五八)
生

られた畏き大御心を奉戴し、「至誠天に通ず」といふ信念を以て進みましたら、國運の隆昌は期して待つべきであります。瑞竹の林がさやくと微風に戦ぐその聲は、常にこの一事を物語つてゐるのでありますまいか。當時、東宮侍従長入江子爵が、この瑞竹の茂り行くさまを傳へ聞いて、感に堪へず、

日のみこの榮えますらむゆく末をはやしとなれる竹に



瑞竹の林の全景

皇后陛下

御名は良子
明治三十六年(三
五)三月六日御
誕生

大正十三年一月
六日入内

皇太后陛下

御名は節子
大正天皇の皇后
明治十七年(二
五)六月二十五日
御誕生

明治三十三年五
月十日入内

小笠原長生

海軍中將

宮中顧問官

子爵
慶應三年(二五七)
舊唐津藩主の家
に生れた

決死の一隊

昭和七年二月二
十二日上海事變
に於て廟江鎮鐵
條網爆破の決死
隊に加入した三
十六勇士

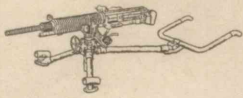
廟江鎮附近



馬田軍曹

第二破壊隊第一
班長工兵軍曹馬
田豊喜

機關銃



みるかな。
とお詠みになりました。
その後會社では、件の御休憩所の竹の柱で、記念のため花生
四基を謹製致しました。さうして一基は天皇陛下、一基は
皇后陛下、一基は皇太后陛下に奉獻し、残る一基は、會社の行
啓記念館に飾りつけたとのことであります。

(蘆田惠之助の文による)

六三つの肉弾

小笠原長生

敵前二十米まで進出した決死の一隊は、敵の猛射を浴びて
その前進をはぐまれると共に、時は一秒々々と迫つた。遂

「強行破壊」

の命は下り、馬田軍曹の率ある第一班は突撃して鐵條網の
破壊を敢行することになつたが、無念や、全員殆ど斃れて、そ
の目的を達することは容易でない。

親愛なる戦友は、憎むべき敵弾のために相次いで、或は悲壯
な戦死を遂げ、或は傷つき倒れた。豫備にあつた第二班の
勇士たちは、燃えあがる悲憤の念に、思はず眦を裂いて敵陣
を睨んだ。

勝誇つた敵軍は、なほも猛烈に機關銃や小銃を亂射して、そ
の危険と凄慘とはいやましに加はるばかりであつた。今

や鐵條網破壊の必要は焦眉の急に迫つてゐるが、壕を出たが最後、忽ちやられてしまふ、鐵條網に到達することなどは到底出来さうにない。

しかも歩兵部隊の突撃開始の時期は刻々に切迫して来る。今にも下るべき突撃破壊の命を前に、三勇士たちは、いかにして、この猛射の中を衝いて破壊作業を達成すべきかと考へた。

死は易い、されど任を果すのは難い。徒に死んで不忠になる！

「今に見ろ、今度こそは完全に破壊して見せるぞ。」

三勇士は、心のうちでかう叫んだ。四六

三勇士
第二破壊隊第二
班第一組工兵一
等兵作江伊之助
同北川 丞
同江下武二

けれども、この場合、目的の達成は殆ど不可能と思はれるほど、險悪極まる状況であつた。

「おい、敵の射撃がかう猛烈では、とても鐵條網へは行きつけないぞ。」

「たとへ行きつけたとしても、破壊筒への點火はむづかしいぞ。」

「あ、さうだ、火をつけてから、その破壊筒を持つて突撃しよう。そして投げこまう。」

三勇士の間には、期せずして、忽ちこの悲壯極まる決心がついた。

この方法こそ、工兵としては最後の非常手段で、身を捨てて

その目的を貫徹する唯一の破壊方法であつた。しかし、三勇士の心の中には、それだけで果して十分に破壊の目的が達せられるかどうか、大きな不安があつた。

「投げこんだだけでは安心が出来ないぞ。」

「よしつ、それなら、ひつ抱へたまゝ、鐵條網の中へ飛びこまう。」

「さうだ、破壊筒といつしよに、おれたちも爆裂してしまふのだ。」

「よし、それならきつとうまくいくぞ。」

三勇士は、じつと手を握り合つて、決死の約束を取りかはした。

實際この場合、爆弾と共に三人が飛込まねば、歩兵突撃路は



肉弾市芝区青松寺内

絶対に開かれないのだ。何といふ健氣な覺悟であらう。自分の肉體を爆裂させて鐵條網を破壊しようといふのだ。わが身を肉弾にして成功してみせるといふ悲壯極まる決心なのだ。鬼神もその壯烈に泣かう！

時は來た、重大任務の時は來た。

「最後の組だつ。」

四九

東島隊長
第二破壊隊長工
兵少尉東島時松

東島隊長の悲痛な叫。

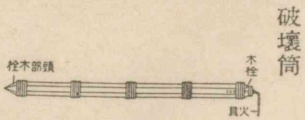
「それつ。」

待ちに待った三勇士は、欣然としてすぐに突撃破壊の準備にかゝつた。

生死を超越した三勇士は、鬼神の如きはやわざで、四米の青竹で作った破壊筒に、次の令を待つまでもなく、すばやく点火した。

「前へつ」

の號令一下、直に飛出した、北川・江下・作江の順序で、點火された破壊筒を引擔ぎ、堰を破る奔流の如く、はた弦を離れた矢の如く、無二無三に飛出した。



身も心も一つになつた三つの肉弾は、何の躊躇もあらばこそ、战友の死骸を飛越え、踏越え、鐵條網目がけて奮進した。この際、一つの破壊筒を三人で持つて行つたのは、その目方が重いためといふよりも、むしろ、仲間の一人が若し途中で斃れたら、残りの二人で飛込む、二人が斃れたら、最後の一人で飛込む、そして必ず成功するといふ方法を取つたのであつた。

三つの肉弾は、北川一等兵を先頭に一つの破壊筒となつて、轟進また轟進、雨と注ぐ敵の猛射の中を突進した。

が、惜しむべし、北川一等兵は小銃弾にやられて、ばつたり倒れ、二勇士も同時につまづいた。「しまつた」と思つた刹那、三

勇士はまた起上り、今しも爆裂しようとする破壊筒をひつかへてまつしくらに突進した。

「あつ。」

と思はず叫ぶ途端

「どかあん……」

轟然たる大爆音が、天地をゆるがして響き渡つた。同時に、大きな肉塊が、火焰と共に八・九米天空に舞上つたかと思ふ間もなく落ちて來た。



廟行鎮の戰跡に於ける實況演習

三勇士の肉弾が爆薬と共に微塵に碎けて戦場の花と散つ

たのである。

悲壯極まる三勇士のこの爆死の光景に怖をなしたか、近くの敵軍は、わあつと悲鳴をあげて逃出した。かくまで尊き犠牲の下に、突撃路の一條は遂に完全に開かれたのであつた。(忠烈爆弾三勇士)

七 東洋理想の歌

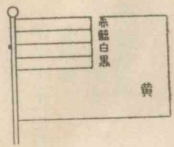
土岐善磨

アジャのひがし朝風に

五色の旗の進むとき、

大地はひろし、王道の

眩き光野にあふる。



五色の旗
滿洲國の國旗

土岐善磨
號は哀果
新聞記者・歌人
明治十八年(五四)
五)東京生

こゝに日本の希望あり。

いざ、人類の幸福と

いのちのために剣とりて、

かの暴逆の軍閥を

匪賊を共に追討たん。

こゝに日本の正義あり。

三千万の民衆が

みづから起ちて新しく

守れば固し、國境の

長城萬里雲霽れぬ。

こゝに日本の防備あり。

運命國を隣して、

無限の富をいま拓く、

文化の榮え永遠に、

世界の平和路近し、

こゝに日本の使命あり。(軍事美談愛國歌謡)

八 雞

薄田泣菫

ふと眼がさめた。頭を持上げて寢臺の小窓へ目をやると、

薄田泣菫
名は淳介
文學者
明治十年(一五七)
岡山縣生

戸外はまだ墨汁のやうに眞暗らしかつた。そのまはうと
うととしてゐると、どこからか雄雞オスドリの曉を告げる甲高カシカマな強
い鳴聲が聞えて來た。

「雞が鳴いてるね。どこか近所で飼つてゐるとみえるね。
私は誰に話しかけるともなく、そんなことをいつた。隣の
室では、家の者が寐返でも打つたらしい物音が、もぞくさと
聞えた。

「あれはお隣の雞ですよ。ついこなひだまで雛兒ひなごだつた
のにもう時を告げるやうになつて……
家の者は寐ぼけ聲でこんなことをいつたやうだが、その次
の瞬間には、すぐにまた寐ついたらしく、ずやく〜といふ寐



筆章玉端川

雞

小さな農村
岡山縣淺口郡連
島町

息の音が微かに聞えて來た。
私はじつと瞼を合はせてみたが、なか／＼容易には眠られ
なかつた。

曉を告げる雞の聲。あの聲こそは、私がそれと氣づかない
で、年久しく私の生活から失つてみたものだつた。小さな
農村に生れて、そこで少年の頃を過した私にとつては、雞は
私の生活の一部分に外ならぬものであつた。私たちは日
毎、毎夜がまだ全く明けはなれないうちから、程なく曉が
來ることを雄雞によつて教へられたものだ。その聲はな
ほ名残を惜しんでそこらに逡巡する夜を蹴散らして、やが
て明けゆくその日をしつかりと把握するに足りるほど朗

かて、雄健なものだつた。私たち農家に生れたものは、晝間の働でどんなに疲れてゐようとも、夢うつゝの境にその聲を聞きつけると、「もう朝がやつて来たのだ。」
 「もう朝がやつて来たのだ。」
 と、どうかするとまだ寢床の中に居残らうとするなまけ心に鞭打つて、すぐにも起上らねばならなかつたのだ。
 それほどまでに雄雞の持つ比類のない敏感さは、しのゝめ時のあるかなきかの薄明りの動きをも、暗黙の間に傳へ、その雄健さはまた、曉そのものの持つ、生れたばかりの新鮮さと雄々しさとを感得してゐるのだ。
 いくら雞舎の扉を嚴重にしめきつても、どんな微かな光線

をも許さぬほど、こまかに隙間々々を目張しても、そんなことには一向頓着なく、眞暗な雞舎のなかの雄雞が、いち早くも東天に搖曳する曉の仄かなおとづれを感知するその感性は、一體どこから来たものだらうか。眞暗な雞舎のなかにゐて、いち早く曉を知りもし、唱ひもするのを、解釋して、それを天雞の遠音のせゐだとしてゐるのは、間違つたことではないが、その天雞は人間の想像を絶するやうな大樹の枝にとまつ



雞 田村彩天筆 鳴

てゐるのではなく、實は血紅色の雞冠をかぶつた雄雞の感
覺の中に棲んでゐるのだ。

それは彼等の祖先が、今も印度の深い森の中にある野雞た
ちと同じく、その樹の陰、この草の中をあさり歩いてあ
た頃から持ちつたへた、知られぬ感性に相違なかつた。

昔は、山に籠つて修行に専念しようとするには、何をさしお
いても、自分と一緒に羽の白い雞と毛並の白い狗とだけは、
必ず連れて往かなければならぬことになつてゐた。白雞
と白狗とは、深山の邪氣を拂ふのになくてならぬものにせ
られてゐたらしい。どんな理由から白色のものが選ばれ
ることになつたか、それは知らないが、深山に隠れて靜かに

思惟の生活に浸つてゐるものにとつては、見馴れぬものを
答める狗の叫と、夜明を告げる雞の聲とは、めつたに缺くこ
とのできないものだつたかも知れない。

「その日／＼の立派な豫言者だ。」

私は寢床の中で寢返を打ちながらさう思つた。この紅い
雞冠を被つた豫言者を自分たちの家に飼ふことによつて、
農夫たちが一年三百六十朝、しのゝめ時のつめたいすがす
がしい大氣と、明るい心と、健康とを、それ／＼自分の家へた
つぷりと取込む。それは何といふ手輕な、そしてまた幸福
なことだらうと、私はまた思つた。

私はそれから何を思ったかをよく知らない。たゞおぼえてゐるのは、とかくするうちに、私がぐつすり寐ついてしまつたらしいことだけだ。

目が覺めたのは、もう八時に近い頃で、西向きの小窓から見ると、隣と地つゞきの空地には、静かな冬の朝の明るい日光が溢れてゐた。その中を雄雞がメス一羽、金色の羽をきら／＼させながら、多くの雌を引連れて、マユリ鷹揚に歩いてゐるのが見られた。

「てつきりあの豫言者だ。」

私はさう氣がつくと、暫くじつとそのそぶりを見てゐた。

豫言者は何か餌らしい物を見つけたが、自分でそれを食べようとしないうで、

「こ、こ、こ……」

と、いかにも愛に充ちたらしい聲で、そこらに散らばつてゐた雌を呼立てた。雌は喜んでその方へ走つて往つた。

(獨樂園)

九 菖蒲の節供

島崎藤村

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的の祭日ではな
宗教上の
いまでも、一年に二度の節供の祝が、たゞ幼い者のためにあ

Christmas

島崎藤村
名は春樹
詩人・小説家
明治五年(二三三)
長野縣生
花祭
四月八日釋迦降誕の日花をたむける祭事
クリスマス
十二月二十五日の基督降誕祭

男の子のために
には五月の
菖蒲のまろの
もいれし

鐘馗 あや
支那で疫鬼を驅
るといふ神

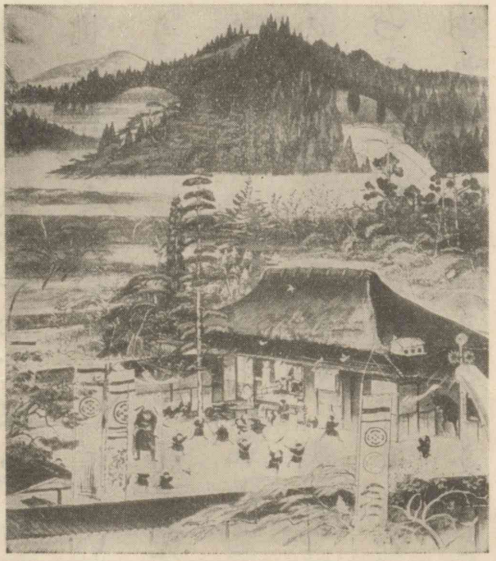


色はなかんぐ
の色 粉た
をかりた
ころ

るのは嬉しい 即ち 女の兒のためには三月の桃の節供、男の
兒のためには五月の菖蒲の節供のあるのは嬉しい。
あの三月の節供に取出されて、今に合唱でもはじめさうな
雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の
節供を祝ふためにあるものは、鍾馗や、鬼や、金時や、桃太郎な
どの行列である。五月の空に高く翻る鯉轍は、恰も子供の
國をそこに打建てたかのやうにも見える。狭苦しい町の
中にあつても、あちこち、屋根の上に鯉轍を望むのは楽しい。
鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒
とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しませるやうなあ
の飛揚。大人の心をも子供の心に返すものは、あのはたは

たと風に鳴る鯉轍の音である。

その他、五月の節供を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、



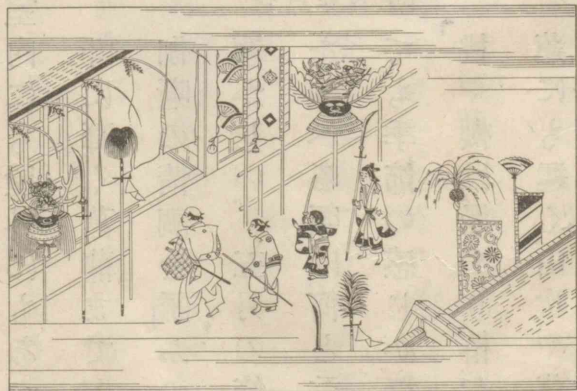
五月の節供
杉山祥司筆

軒に葺く菖蒲までがお
伽嘶の情調を誘ふのも
懐かしい。五月の節供
を迎へる頃は、何と言つ
ても季節の感じが深い。
桃や櫻は過去り、椿や木
蓮にも遅く、山吹や藤や

満天星などの花が香氣を放つ五月の初は、一年の中の最も
楽しい季節の一つである。遠い山々へはまだ雪の來る日

菖蒲の節供
五月五日には
菖蒲湯をす

があつて雨でも降れば袷では寒いこともあるが、私たちの周囲は、もはや若葉の世界である。この好い時候に、楽しい菖蒲の節供がやつて来る。桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も好い。爽かみづみづしい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでな



菖蒲の節供
本日
菖蒲の節
記事

粽



粽の事について
つかひがある

く、私たちの身をも心をも温めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中を掻分けて湯槽に浸るのも樂しみだし、あの葉が私たちの肌などへべたつとついたとき、の心持もわるくない。粽の香は幼い日の香である。粽ばかりは鄙びた處で作られるものほど好い。あの細長い笹の葉の巻付けてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は、今もなほ忘れられない。粽の外に、柏餅・赤飯などと數へて来ると、五月の節供を祝ふもので、何がなしに懐かしい思を誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。(藤村讀本)

岡谷繁實

勤王家

修史局編修官

上野國館林生

大正八年卒

年八十五

天王寺口の戦

元和元年(二七五)

五月六日

眞田幸昌

通稱は大助

幸村の長子

元和元年戦死

年十六

幸村

幼名は源五郎

通稱は左衛門佐

昌幸の次子

元和元年戦死

年四十六

一〇 花の若武者

岡谷 繁 實

大阪夏の役天王寺口の戦に、眞田幸昌、敵と組討して取りたる首を鞍の四方手に付け、負うたる傷より流るゝ血しほ拭ひもあへず馳歸る。毛利豊前守勝永、榎島玄蕃允昭光、幸昌が傍に立寄り、扇を開きて打ちあふぎつゝ、さてもくゝと大いに感じけるに、父幸村も喜悅の笑を湛へて、手は淺きか。と尋ねければ、幸昌は、薄手にて候。と答へたり。明くる七日、和議將に成らんとするを聞き、幸村、陣より幸昌を城内に返さんとして、近くこれ呼び、汝、左衛門が子たる故を以て、諸將と肩を比べて采配を取ること、身の面目に非ず

秀頼公

豊臣秀頼

元和元年大阪夏の役に戦敗れて自殺した

年三十二

や。父は今日討死と思ひ定められたれば、今生の名残に、父をよく見覚え置くべし。この軍愈、味方敗北して、秀頼公御自害あらば、其方も直に腹搔切つて、死出の御供申すべし。命助らんとて、必ず降人などに出て、父が名を汚すべからず。若し又秀頼公この度の死を遁れ給はば、假令何れも自害に及ぶとも、其方は命を全くして、下人一人にても生残りたる者あらば、扶持し召連れて、秀頼公を守護し申すべし。くれぐれも父が武勇の名を汚すことあるべからず。これ、子たる者の孝行の第一。親の志を繼ぐこそ忠義なれ。早々城内へ罷り歸れ。とぞ言ひける。幸昌父が詞を聞く中より、落涙に袖を絞りけるが、やうく

父幸村が大坂城に命ずる

に歎を止め、情なき仰かな。討死と思し召し定め給ひなば、大助にも共に討死仕れとこそあるべきに、如何でさは宣ふぞや。秀頼公を見立て申すこと忠義に候はば、父上その任に當り給ひてこそ、かひはあるべけれ。然るに父上は討死ありて、弱年の某に罷り歸れとの儀、心得難く候。關東勢の中に、伯父伊豆守殿を始め、一族の人々もおはし候へば、父が討死に、忤の大助は何とて一緒にあらざるぞや。父を棄てて腑甲斐なくも陣屋より城内へ遁れ歸りしか。など嘲り給はん。他人はさておき、一族親戚への面目甚だ以て立ち難し。秀頼公を御見立て申さんは、御譜第の人々多ければ、大助が罷り歸るにも及び候はず。又去年母上に別れ奉り

伊豆守
眞田信幸
幸村の兄
信濃松代藩主
萬治元年(三三〇)
卒
年九十二

し後御文の便に「生きながらへて相見んは願はしけれども、萬一の際には必ず父上と同じ枕に討死せよ。ものゝふは



眞田幸昌

名こそ惜しけれ。」と誠め給ひしこともあれば、くれぐれも御免下さるべし。御一緒に今日の軍に罷り立ち、せめて雑兵の二三騎も討取り、その後腹搔切つて黄泉の御供仕らん」と言切つて、歸るべき氣

色は見えざりけり。幸村も心強くは言ひけれども、今は落涙に及びつゝ、いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら、父と一緒に討死するこ

幸昌又と共に戦死
せん願ふ

と忠義の道に叶はず。長く命を全くせよといふには非ず、今日は命ながらへて、明日にてもあれ、秀頼公御自害の砌、潔く腹搔切つて、泉下に再會を期すべし。今日の御和睦御相談の事、その實否知れ難し。さればとて、その成行を見定めんとて、左衛門程の者が出陣の馬を無下に城へは返されじ。又、戦を猶豫し形勢を窺ふ様子見えなば、必定味方の士氣も衰へぬべし。さるによりて、我はこれより引返すこと成り難し。あはれ、世の人の願ふ命二つ持てるこそ今の我が身の幸なれ。二つの命を君に捧げて、一つは今日討死して武名を揚げ、今一つは城内へ歸つて、今日明日の體を見届けんとは思ふなり。汝が命はくれども、汝が命にあらず、父が

命なれば、父が心に任せ、早々罷り歸りて秀頼公の先途を見届け奉るべし」と、詞を盡くして教訓しけり。幸昌やうくに聞入れて、然らば御暇申して城内に罷り歸り申すべし。愈、今日討死と思し召し定められしや」と、又父が顔を守り見て涙に打沈む。幸村詞を荒らげ、親子の名残何時まで惜しみたればとて、盡くる期あるべしや。左衛門が子の大助、父と引分れて城中に歸り、秀頼公の御生害の際まで附従ひたり。といはれんこと、後代までの譽、餘人の及ぶべきにあらず。早々罷り立てよ。と言ふ。幸昌、成程仰にてこそ候へ。父上の御名を預りしこの身、よに大切に候へば、寄手の追ひつかぬ内に御暇申さんと、心強く思ひ切つて父

譽田
大阪府南河内郡
古市村大字譽田

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稻田大學教授
明治七年(五十四)
米澤生

が前をば立出で馬に乗るべき體に見えけるが、なほも父が
方を見遣りて佇むを、幸村近習の者を以て、急ぎ罷り越すべ
き由催促しければ、せん方なくも乗出し、幾度ともなく父が
方を見返りつゝ、やうく坂を下りて城内に歸りたり。
幸村は幸昌を見送り、落つる涙を押へ、昨日譽田にて痛手負
ひしが、弱る體の見えざれば、よも最期には人に笑はれじ、心
安し。と言ひけりとぞ。(名將言行錄)

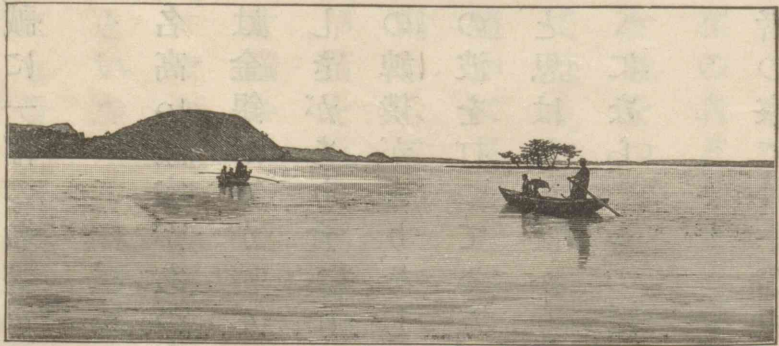
二 湖山長者

五十嵐力


山陰線の鳥取驛から西の方へ十二軒あまり行くと、鏡のや
うな湖水がある。湖山池といつて、周回が十六軒近くもあ



らう。西南の方には丘陵や小山が波
のやうに起伏して、春は爛漫たる紅白
の花に彩られ、夏は滴る樹々の翠に潤
され、秋は燃立つ千入の紅葉を以て飾
られる。東北の方には田畑が廣々と
連なり、砂の丘を隔てて、遙かに漫々た
る碧の海を望むことが出来る。かや
うに山と海とのえならぬ眺を兼ねた
上に、湖の面には時々蘆荻の生ひしげ
つた間に鶯鷗の閑眠を貪るのが見え、
又仙人めいた舟子の網を擧げて細鱗



湖山池



を捕るのが見える。景色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展
げたやうな趣がある。今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。
住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで
山をなしてゐた。着るには綾錦の美しきがあり、食ふには
山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして
所有の田地は、見渡すかぎり廣々と稻の波を打つてゐた。
たとへば天下の富をこゝに集めたかと思はれるばかりで、
世の中の事、何一つこの長者の思ふまゝにならぬものはな
かつた。或年、夏の田植時の事である。湖山長者の家では、季節中の

最上の吉日を卜して、その廣田に田植をすることになつた。
長者の家に使はるゝ者は勿論、近郷近在の者どもまで、今日
こそ長者の田植だといふので、老幼男女數をつくして身支
度かひなく、しく、田圃をさして出かけて行く。長者は高殿
の欄干にもたれて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつゝ、己
が限りなき富に、思はず得意の微笑を漏らしてゐた。
さる程に、仕事は面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手
の動く度ごとに、濕つた黒い土の色が片端から青くく、變
つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮近くな
つた。仕事はめきくと運んだが、何といつても長者が廣
い田地のことであるから、植ゑるに果てしなく、まだ數段殘

つてゐる中に、日ははや西の山に入らうとした。長者はこれを見て、あゝ、今少し日が高くば、残らず田植が済まうものを！と、しばし深き思に沈んだが、つと立つて、黄金の扇を持來り、さつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度までさしまねいた。見る間に、山の端にかゝつた夕日は三間ばかり昇つて來た。長者の喜と心おごりとは、どんなであつたらう。田に立つてゐた村人たちは、天道様を左右する長者の威力を見て、いかに驚いたことであらう。かくして、これまでと思つた田植も思ふまゝに捗つて、その日は無事に暮れた。田植に出た人々は終日の働に非常に疲れたが、長者がねぎ

らひの酒食に歡をつくして、いづれも快く枕に就いた。寐覺の牛の聲がゆるやかに響いて、短い夜はやがて明けた。朝の床を起出でて背戸の流に落合つた村人等は、申し合はせたやうに先づ昨日の田植の苦しかつたことを話し、次には入日を招き返した長者の恐しい力をたゝへた。それから昨日幾千人の人が一日に植ゑあげた田の有様を見ようとして出かけたが、誰一人腰をぬかすばかりに驚かぬものはなかつた。驚くの無理はない。見よ！さしにも廣かつた長者の田地は跡かたもなくなつて、漫々たる湖が、朝の嵐に白い波を立ててゐるではないか。

泉の三郎

藤原秀衡の三男
忠衡

柳澤淇園

名は里恭

大和國(奈良縣)

郡山藩の重臣

文武諸藝に通じ

てゐた

寶曆八年(四一〇)

歿

年五十三

秀衡

藤原氏

奥州の豪族

鎮守府將軍

陸奥守

文治三年(八七五)

卒

數千人で一日植ゑつけた早苗が一本も見えないで、渚には群立つ蘆が波に洗はれ、風にそよいでゐるではないか。長者の家は、この時から一日々々と衰へた。そして終に、この廣い田と同じやうに、全く亡びてしまつた。

この池は、これより湖山池と呼ばれて、千古曇なき鏡を展べつゝ、このほとりの住民に盡きざる教訓を與へてゐる。

(趣味の傳説)

三 泉の三郎

柳澤淇園

「子を見ること親にしかず」といへり。奥州の秀衡は男子五人あり。兄錦戸太郎は、よき馬を好みて常に山野を馳せま

はり、元良の冠者は女子を友として遊ぶことを好み、伊達の次郎は山川の漁獵を好みて、他のことをせず。泉の三郎は武具を好みて、よき物ある時は求め來りて、みづから試み、刀劍なども、作物は人にも譲り與へ、よろしからざるは挫き折りては捨てたりとぞ。文學の道を習はするに、何れも皆嫌ひて、只他の業のみを事とせしが、泉ばかりは夜を日に繼ぎて、つとめたりけり。

或時、秀衡は子どもの志をためし見んとて、秋の末つかた、金華山へ皆々を伴なひ、山上に席をまうけて、山河の風景を眺望せり。子どもを集めて申しけるは、何れも、遙かなるあなたの山の尾上に、ひと木の櫻あり、今をさかりと見えて、花の

金華山

宮城縣牡鹿半島の東南端近くにある島

爛漫と開ける、雪かあらぬか、みなくくの眼にも、さぞかし麗しく見ゆるならん」と申しけるに、おのく延びあがり立ちあがりつゝ見て、「いかにも仰の如く、櫻花今を盛りと見えて、麗しく見え侍るなり」といふ。泉は暫くながめつれども、櫻花の見えざりければ、父の側にいたりて、仰に隨ひて見侍れど、わが眼には花らしきもの少しも見え侍らず」と對へけり。秀衡心におもふやう、「花なきを有りといひしは、彼等が心を



藤原中尊寺藏 秀衡

高濱虚子

名は清

伴人

明治七年(二五三)

愛媛縣松山生

湖水

琵琶湖

部屋

比叡山延曆寺東

塔の宿院の室

試みんとてのわざなり。四人は見えもせぬ花を、我にへつらひて有りといふに、泉ばかりは無きゆゑにこそ無しとはいへれ。勇は錦戸すぐれたれども、詔ふ心あり、元良は柔弱なり、伊達は義あるに似て勇なく、泉は勇少しといへども義あり」と。

その後、九郎義經奥州に來りて、秀衡を頼み居けるに、鎌倉より討手下向しければ、秀衡泉に遺言して、義經を蝦夷へ落し、義名を後世に留めたりとなん。(雲萍雜志)

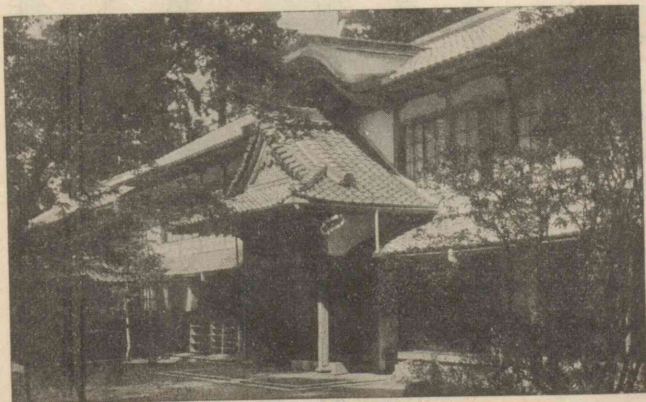
一三 比叡の鳥

高濱虚子

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて

見る。朝日が一杯にはいつてゐる。

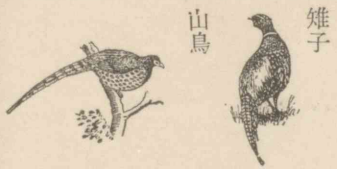
湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつてゐるので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が、さながら銚のやうに突つたつてゐる。左手には北谷の向ふに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れてゐる。空氣がいやが上に清いので、近景の杉の梢



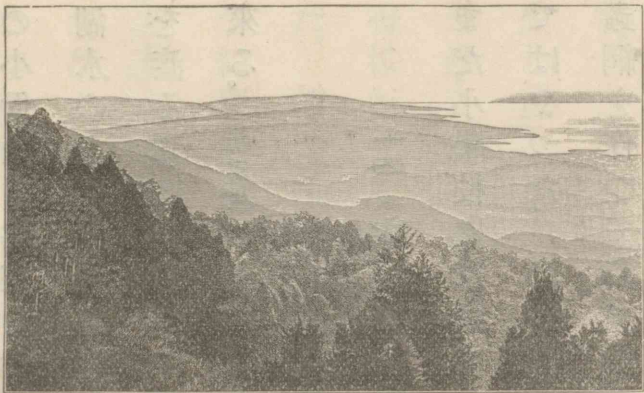
比叡山延曆寺宿院

も、遠景の杉の杜も、ともに新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れてゐる。

非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地を我が物顔に啼囀つてゐるのは小鳥だ。何といふかはいゝ、聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽が啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますと、なほ二、三羽の聲が、どこかで聞えるやうだ。この小鳥の合奏を破るやうな別な聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥程優しい聲ではないが、又りゝし



いとところがあつて、その聲の空山に響く趣が何とも言へぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽・四羽と段々聲の主が殖えて来る。前の小鳥が縦絲なら、この小鳥は横絲だ。互に錯綜して、よく諧調を保つところが面白い。突然けんくとけたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹を唯一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとの静かさになる。眞先にその静かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる



比叡の杉

緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦絲を織つて前の小鳥が啼く。横絲を織つて次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦絲が啼く。横絲が啼く。この絹をまた山鳥が破るのかと思ひながら待設けてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい

啄木鳥



音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといった。二人の小僧は山鳩だらうといった。湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つてゐる。杉の梢を渡る霧は少しづつ薄らいで、だんくくと谷が深く見えて来る。(新寫生文)

吉村冬彦

本名は寺田寅彦
物理學者
理學博士
東京帝國大學教
授
帝國學士院會員
昭和十年薨
年五十八

一四 兜 蟲

吉村冬彦

まだ小學校に通つてゐた頃、昆蟲を集めることが友達仲間ではやつた。自分も母にねだつて、蚊帳の破れたきれで捕蟲網を作つて貰つて、土用の日盛にも恐れず、これを肩にかけて、毎日のやうに蟲捕に出かけた。蝶や蛾や甲蟲類の一

城山

作者が少年時代を送つた高知の舊城址

番澤山に棲んでゐる城山の中をあちこちと、永い日を暮した。二の丸三の丸の草原には、珍しい蝶や、ばつたが夥しい。少し茂みに入ると、樹木の幹にさまざまの甲蟲が見つかる。玉蟲こがね蟲、米搗蟲の種類がかずくゝゐた。強い草木の香にむせながら、胸を躍らせながら、こんな蟲を捕つて歩いた。捕つて來た蟲は熱湯や樟腦で殺して、菓子折の標本箱へ綺麗に並べた。さうして、この箱の數の増すのが何よりの楽しみであつた。蟲捕から歸つて來ると、からだは汗で浴びたやうになり、顔は火のやうであつた。「どうしてあんなに蟲好きであつたらう」と、母が今でも昔話の一つに數へる。年を経て色々な面白い事にも出あつたが、あの頃珍し



い蟲を見つけて捕へた時のやうな鋭い喜は稀である。今でも城山の奥の茂みに蒸された朽木の香を思ひ出すことが出来るのである。いつか城山の裾のお濠に臨んだ暗い茂みにはいつたら、一株の大きな常山木があつて、桃色がかつた花が梢を一面に蔽うてゐた。散つた花は風に吹かれて、汀に朽沈んだ泥船に美しくちらばつてゐた。この樹の幹には處々蟲の食ひいつた穴があつた。穴の中には細かい木屑が蟲の糞と共に零れかゝつて、一種の臭氣が鼻を襲うた。樹の幹の高い處に、大きな見事な兜蟲が嚴めしい角を立てて止つてゐるのを見つけた。自分の標本箱にはまだ兜蟲のよいのが一つもなかつたので、胸を轟かして網

を上げた。少し網が届きかねたのを、やうやくのことで、おさへて、腰につけてゐた蟲籠に急いで入れて、包み切れぬ喜を抱いて森を出た。

三の丸の石段の下まで來ると、向ふから美しい蝙蝠傘をさした女が、子供の手を引いて樹陰を傳ひ々來るのに逢つた。町の良い家の妻女であつたらう。傘を持つた手に藥瓶をさげて、片手に子供の手を引いて來る。子供は大きな新しい麥藁帽の紐をかはい、頤にかけて、眞白な洋服の様なものを着てゐた。自分の提げてゐた蟲籠を見つけると、母親の



兜蟲

手を離れて覗きに來たが、眼を圓くして母親の方へ駈けて行つた。そして袖をぐいぐい引つばつてゐると思ふと、又蟲籠を覗きに來た。母親が早くお出でよと呼ぶけれども、なか／＼自分の側を離れぬ。強ひて連れて行かうとする。と、道の真中にしやがんでしまつて、とう／＼泣出した。母親も途方にくれながら叱つてゐる。自分はその時蟲籠の蓋を開けて兜蟲を引出し、道端の相撲取草を一本抜いて、蟲の角をしつかり縛つた。そして「さあ」といつて子供に渡した。子供は泣きやんで、きまりの悪いやうに嬉しい顔をす。母親は驚いて子供を叱りながらも禮をいつた。自分は何だかきまりが悪くなつたから、黙つて空になつた蟲籠

を打振り／＼駈出したが、嬉しいやうな、惜しいやうな、嘗て覺えない氣持がした。その後度々同じ常山木の下へも行つたが、あの時のやうな見事な兜蟲は、もう見つからなかつた。又あの時の母子にも、もう逢はなかつた。(藪柑子集)

一五 橘中佐 (原漢文)

土屋鳳洲

橘中佐、名は周太、長崎縣の人。明治二十年、陸軍士官學校を卒へ、歩兵第五聯隊附に補す。二十四年選ばれて東宮武官と爲り、恪勤事に従ふ。大尉に任ぜられ、進みて中佐に至る。三十七年露國を伐つや、歩兵聯隊大隊長と爲り、第二軍に屬

漢文の考査に
と出る。

土屋鳳洲
名は弘
漢學者
女子學習院教授
舊岸和田藩士
大正十五年卒
年八十五

遼陽

滿洲國奉天省太子河右岸の州城

首山堡

遼陽城の西南方にある丘陵

大島中將

第三師團長大島

義昌

後に陸軍大將

子爵

舊山口藩士

大正十五年薨

年七十八

關谷聯隊長

歩兵第三十四聯

隊長陸軍歩兵大

佐關谷銘次郎

す。八月三十日、進みて遼陽に向ふ。(敵之を首山堡に扼す。大島中將、關谷聯隊長をして之を攻めしむ。中佐一大隊を率ゐて第一線に在り。時に夜二鼓。(弦月山に懸り)殺氣天



橋中佐

靜岡歩兵聯隊第三十四營內

す。丸を發すること猛雨の如し。我が兵近づくこと能はず。中佐切齒、蹶然躍りて壕中に入り、刀を揮ひて敵三人を斬る。我が兵勢を得、奮進激闘、一以て百に當らざるなし。

に滿つ。敵絶壁に據る。峻險削るが如し。且塹壕一道を鑿ち、力を竭くして守禦

遂に堡壘を奪ひ、黎明、高く旭旗を樹つ。

既にして敵兵を増し、三面より來り攻め、十字砲火を放ち、煙塵空を蔽ふ。我が軍窘急し、死傷頗る多し。中佐も亦傷つ

く。而も毫も屈せず。親ら創を褰み、儼として壘頭に立ち、叱咤指揮す。軍曹某呼んで曰く、敵衆盛にして當り難し。

嗚ぞ少しく退き、以て再舉を圖らざると。中佐曰く、部下多く斃る。我何ぞ逃るゝに忍びん。且纔かに壘を得、旋つて

之を失はば、吾が軍の面目を如何せん」と。某歎服し、共に死せんことを誓ふ。一彈丸あり、忽ち來りて中佐の右肩に中り、倒る。某負ひて峻坂を下り、松樹の下に憩ふ。一丸又來り、二人を貫き、鮮血淋漓たり。中佐南望し、遙かに皇城を拜

試験

卷一 一六 九十九里濱

して曰く、「臣が事畢れり」と。某亦泣く。且起ち且仆る。適中佐の從卒走り來り、負うて營に還る。卒す。齡四十一。外史氏曰く、之を聞く中佐人と爲り剛健。身を奉ずる簡素にして、冬は暖を取らず、夏は涼に就かず。曰く、身骨を鍛へ、以て緩急に應ぜんと欲するなり」と。夙に皇恩を重んず。其の東京に在るや、書生の郷國より來る者ある毎に、輒ち先づ拉して二重橋外に詣り、皇居を瞻拜し、以て常と爲しきと云ふ。

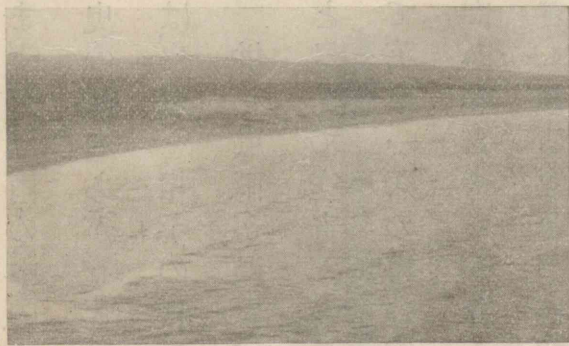
第九十九里濱
千葉縣の東海岸の砂濱
北は下總の銚子市の南飯岡岬から南は上總の大東岬まで六町一里（約六百五十九里）にして九十九里あるを云ふ
猪一郎
徳富健次郎
號は蘆花
文學者
肥後國（熊本縣）生
昭和二年歿
年六十

第 一六 九十九里濱
小説家
徳富健次郎

活の戦場で、同時にその遊び場でもあります。風雨の中の舟の引揚げ、一時を争ふ漁舟の乗出し、地曳の網のあがりぎは、男は赤裸、女は眞顔で、曳々聲を出す時は、自然を相手の戦争といふ感がひしく、と人を壓します。併し風雨が過ぎて二三日、右に大東、左に飯岡の岬も歴々と見えて、空青々と、日麗かに、心地好い程の南風がそよ吹いて、万里一碧の海の笑顔に愛嬌ばかりの白波を立つる日は、向ふの方でながらみ貝を搔く男も、赤裸で、子供の風呂桶ほどもある飯櫃引寄せ、立ちながら茶漬を食うてゐる赤銅作の仁王様も、一張羅の晴着を汗にすまいとして、それを風呂敷に包んで、負つて、紅い襦袢一つになつて波打際を行く田舎娘も、街道の砂ぶく

大東
大東岬
千葉縣夷隅郡大東村
飯岡
千葉縣海上郡飯岡町
ながらみ貝
きしやごの一種中の肉は食用に供し殼はおはじきに用ひる
砂ぶく
砂のぶく／＼とつもつてゐるところ

に引換へてしつとりと弾力ある波打際の砂路を荷馬車挽かして行く向鉢卷の男も、自轉車の小僧も、砂の上に坐つて日がな一日のんきに網を繕うてゐる爺さんも、その子のおもちやに小蟹をとると懸命に両手で穴を掘つてゐるかみさんも、人形のやうな両手を舉げて家鴨の蹠のやうな兩足でよちよち走つて来る三歳の女兒も、それらを見てゐる私どもも、鬼がゐない賽の河原の砂遊をしてゐる一様の子供としか思はれません。まことに人生は嚴肅であります。そして

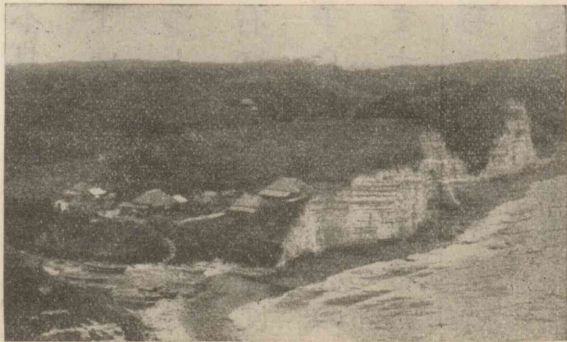


大 東 崎 と

賽の河原
冥途で子供の亡
者が石を拾つて
塔をつむといふ
ところ

カンヴァス
Canvas
畫布

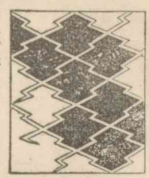
て又快活であります。この砂濱は又大きなカンヴァスであります。色々のものが色々のものを描きます。風が掃ひ、雨が流し、波が洗ふに任せてあるこのカンヴァスの上に、勿論不朽とか無窮とかは許されません。しかし、刹那のものにも人間の不朽よりめでたいものはあります。



九 十 九 里 濱

第一にめでたい波の手の跡を御覽なさい。波は活きてゐます。活きた波の手の跡に、波の氣分が顯れてゐないのはたゞの一筆だつてありません。彼は好んで砂をしぐらに

松皮模様



朽木形



玉目形



織ります。松皮模様を描きます。鱈皮を作ります。朽木形。鉋をかけた玉目形。頗る意氣な綾や縞も彼の手です。人の足跡。子供の足跡。轍の跡。馬の足跡。大きな梅花模様は犬が行くく描いたのです。不具な楓の三本趾鳥にしては大勝なのは烏に違ない。ひよいひよいとやゝしばらく續いて、何かに驚いてぱつと飛立つたげであります。小さなく模様の、小刻みに右につゞいて左に折れ、また翻つてもとへ戻つて居るのは、千鳥か何ぞの心の曲折を語つてゐます。蟹の足跡があります。貝のあるいた跡があります。ある時、小さなく刷毛で、ぱつくと描いたやうな織いく半月形を、これは何だらう、一體何が描いたのだらうと、よく見て居ると、龍の鬚に似た小さな草が、そ知らぬ顔して、「私ぢやありません」と織い首を掉つてゐました。

龍の鬚
草に似た草
人家の軒下など
にうゑる

粕谷

東京府北多摩郡
千歳村の大字
東京市の西郊
作者の居住地

伊香保

群馬縣群馬郡伊
香保町
作者は九十九里
濱へ行く前に伊
香保に遊んだ

甘藍

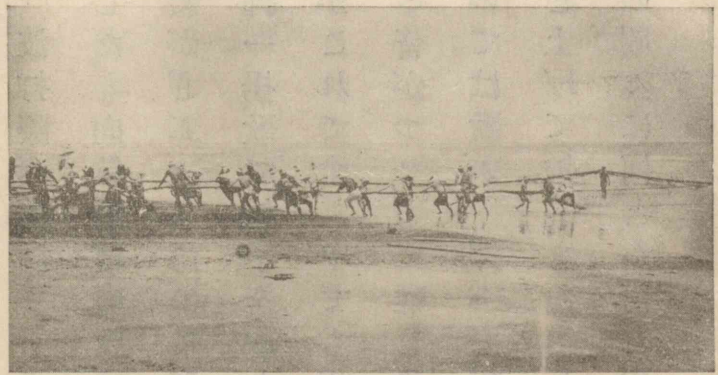
Cabbage

九十九里に往つた最初は、七月というてもしけがちで、この大きな海を前に控へながら、毎日豆腐や粕谷から持参の甘藍、豌豆、伊香保の干蕨の類ばかり食うてゐる日が續きました。その内二週間もたつと、七月も半ばになつて、鱈の地曳網が始まりました。私どもが歸る頃には、鱈も大きく、味も大分よくなつてゐました。朝暗い中から拍子木が鳴ります。地曳の始る知らせです。私が浴衣一枚で海水浴に行く頃は、大抵もう曳き始めてゐました。よく風いだ朝などは、地

曳の組が幾組もく、南に北に並んでゐます。霧の中に小さく見ゆる組、もう眼に入らぬほど遙かな杳かな組もあります。なるほど九十九里は大きな濱です。腰と踵に力を入れて、急がず休まず、永劫に續くかのやうにじわく、曳くのも、見てゐて力が入るものですが、網の目標の浮樽が見えて来てからの活氣は、また見物であります。約十町も離れて曳いてゐた南北二列の曳子が、追々近寄つて来たかと思ふと、一方の列が網を抱へながら、えつさ、えつさと他の一列の方へ走せ寄ります。鉢巻の赤裸男がざんぶと海に飛込んで、網元へ廻ります。棒手振が寄つて來ます。やつさ籠が幾箇もく、並べられます。波打際では、其

方曳け、此方しぼれと網主が罵りわめいてゐます。私どもも砂の上から立ちあがつて、そろく波打際へ向ひます。もう綱は盡きて、繩網が見えて來ました。向鉢巻腰膚脱いだい、加減を婆さん、かみさん、娘までがざぶく、海に飛びこんでいつて、件の繩網を攫んで、一抑一揚歌で拍子を取りながら引張ります。名物の地曳歌がこれです。中でも年配の女が金切聲で音頭を取ります。皆がつといて囃します。彼一句、此一句、歌つては曳き、曳いては歌ふ。抑へて揚げて、俛んで、伸びて、右の片足ひよいと上げて、拍子も面白く、網は段々あがつて來る。一樣な節の間々に、何とか何とか、やあい」と一齊に囃すときの面白さ。

もう網が見えて来ました。網の繼目を全速で解く。海に潜つて網の囊をしぼる。眞裸の網主が咽喉も裂けよとわめく。一切の男女はぐるりと網に取りつき、何とか何する、何とか何せい、何とか何とか、やあい。をやはり歌ひつゞけながら、網を手續つては勿ね、しぼつては勿ね、段々囊の底へ魚を寄せて行きます。子供が攜網を持つてたかります。もう網の中は、さつきから鰹や鯖の青光白光が、ばたく、ばた



網曳地の濱里九十九

鷗



みさご



かいつぶり



ばた、ごつたかへしてゐます。鰹の千五六百はいるやつさ籠が持つて来られて、一杯になると、向鉢巻、雙肌ぬぎの女たちが二人で籠の縁を攫んで、やつさ、やつさで濱へ持つて行きます。どうと置くこともあり、ぶつくりかへすこともあります。いやもう盛なことです。地曳通ひは私共の日課でした。私はかく自ら嘲りました。地曳すればわれも鷗と飛んで来つ魚獲んとして去りがてにする

拍子木が鳴ると、いそぐ飛んで濱に行き、獲物を手に入るまでにはうるついで立ち去らぬ私は、魚欲しさに地曳網の上を往つたり来たりするあの鷗や、みさごや、かいつぶりさ

荻原井泉水

俳人

名は藤吉

明治十七年(二五四)

東京生



一七 富士登山

荻原井泉水

んたちに似寄つたものでした。(新巻)
お山は實に鮮かに晴れてゐた。夕陽の色どりを失つて、ただ黒く隆々と盛りあがつた偉大な土の塊が、却つて彫刻的な尊嚴を以て仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲の影一つさへなかつた。晝の光が消えうせたにもかゝらず、空氣そのものが光を持つてゐるやうに、淡青く暮れずにゐた。路はお山へ向けて眞直についてゐた。馬は馴れた道を心得顔に、自分の好きな歩調で私たちを運んでゐた。

女郎花



月見草



富士の裾野(吉田口)

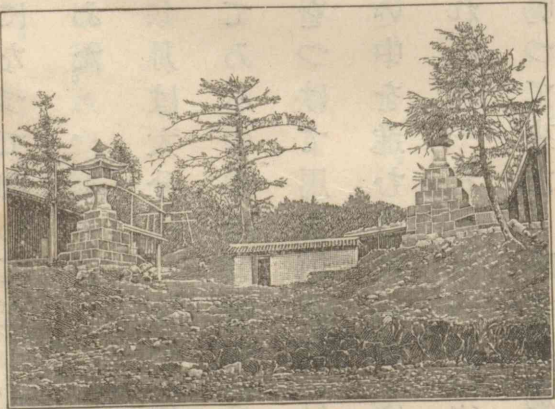
こゝらの裾野には小松が多かつた。小松の中には秋草がさまざまに咲いてゐるらしいが、丈の低いのは皆夕の色に埋れてしまつて、背の高い女郎花と、路傍に近く咲いてゐる月見草とだけが暮れのこつてゐた。ふと西の空を見ると、今しも現れた明星が、たつた一つ、ぱつちりと光つてゐた。それはこの限りもない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又この山の昔ながらの尊さを私たちに暗

示する表象かとも思はれた。私はだん／＼薄れる靄モヤに包まれてゆくやうなあたりの景色を馬上から眺め、やがて眼をうつして明星に見入った。そのとき、何といふことなしに、涙ぐましいほど美しく寂ヒトシしい感激が、心にこみあげて來るのを覺えた。

「お、月が……」私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは東の空に低く研ヒぎすまされた、眞圓い月が、玲瓏と搖ヒぎ出た所であつた。月が出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一様に淡青かつた空や裾野はくつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帯びた。そ

メリヤス
Medias

してお山はいよ／＼黒く大きな姿を以て出現した。その半腹から上の方には、寶石のやうな灯が點々として鏤ハめられてゐた。それは石室いしむらの灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして私たちの七頭の馬が長い黒い影を投げはじめた。馬返の茶屋に着いた時は、夜氣を感ずるほどだつた。「これから山も高くなるし、夜も更けるから」と強力がうりきがいふので、私たちはメリヤスの肌着を着こんだ。櫛かたの明りの暗い手元で、盥ウ鉢ハを一杯



吉田口馬返

づつ食べた。そして又めいゝの馬に乗つた。「今夜のお山はいゝぞ」。「こんな日和は今年になつて初めてだ」——馬子と茶屋の主人とが、かう話してゐた。

一合目から上は樹の茂みがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりとかぶさつてゐるので、路は暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提燈をつけて馬を導いて行く。後の馬はたゞ先の馬に續いて暗い中を進むのであつた。勾配もだんぐ急になつた。それに岩や石が多いと見え、馬の蹄の音がかつくと鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、急な登りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛散つた。しかし、樹の枝の疎らになつてゐる處

では、月の光が雪のやうに葉の上に輝いて、そこらを明るくした。又ふと、茂みのとだえてゐる處では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上に溢れてゐた。さういふ處を、馬は勇ましく歩を運んだ。三合目・四合目の室はもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうに、びたりととまつた。樹帯はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へてゐた。私たちはその室にはいつて、熱い茶をうまく味はつた。そして用意して來た

夕食の辨當を開いた。室には泊つてゐる人が蒲團を一枚かけてごろ／＼と寝てゐた。



五合目は「天地之境」と稱せられてゐる。如何にも、この邊まで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、薄い夕霧がしつとりと襲つて來るやうに思つたが、それはもや／＼とした白い雲となつて、こゝから見ると、低く裾野一面を蔽うてゐる。そのあなたに、吉田の町の灯がちら／＼と光つてゐる。それ

吉田口
山梨縣南都留郡
福地村上吉田
富士山東北麓の
登山口

船津
山梨縣南都留郡
船津村
富士山の北麓
河口湖畔にある



金剛杖

よりも尙遠く尙幽かに見えるのが船津の灯であつた。馬と馬子とを返してから、私たちは強力を先に立てて、静かに静かに一歩々と踏んで登つた。この夜ふけの山を踏んでゐるものとしては實に私たちだけであつた。鳥もゐず、蟲もゐず、死のやうな静寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、かちり／＼と岩にあたつて鳴つた。その杖は、五合目の室で「天地之境」といふ焼印を押してくれたものだつた。月はまことによく冴えて、何の遮るものもない山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると、十時を二十三分過ぎてゐるその針が、はつきりと月光に讀まれた。

濱梨



薊



ベンチ

Bench 腰掛

精進の宿

山梨縣西八代郡上九一色村精進なる精進湖畔の宿

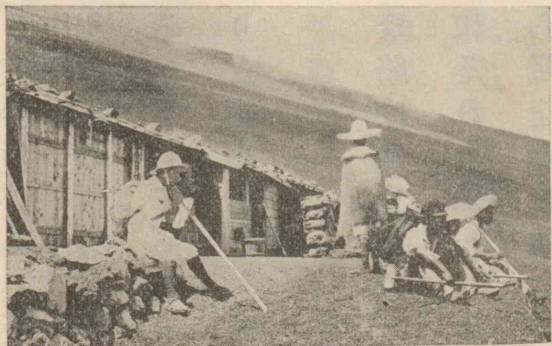
自分の服にさはつて見ると、露でしつとりとしめつてゐた。塵や笠は暑さを凌ぐために身につけて來たのだが、それが今では露を凌ぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすがつて生えてゐる僅かの青いもの——はまつ松や、濱梨の木や、薊あきみなど——の葉にも露が光つてゐた。空を見ると、疎らな星が、大きな露の雫のやうにきら／＼してゐた。さうした星が、ふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、白い雲が海のやうに浪立つ下界の方へ——
六合目の室はぴつたり閉ぢてゐたが、その前に差掛けのベンチが出來てゐる。そこへ腰をかけて休んだ。私は精進

の宿を立つ時新しくかへて來た草鞋を踏切つたので、強力ちからの背から一足取出させて穿きかへた。室の戸があいて、ここに泊つてゐた男が、出て來た。その男は崖の所へ行つて、あたりを見まはして、ぶる／＼と身ぶるひをして、「おゝい、月だな」といひつゝ、又室の戸をぴつたりと締めた。

頂に近くなるとともに、路といふやうな路は無くなつてしまつた。人が踏んだあとの砂で、僅かにそれと知られるけれども、踏みかためられてはゐないから、足をかけると、さく／＼と、さく／＼と、さく／＼と、歩みは著しくはかどらなくなつた。「懺悔げんげ——六根清淨——」登山の行者が唱へるこの言葉

を、先へ行く者と後になつた者とが、お互に唱へかはして、心を引きしめあつたりした。

七合目を越して、八合目の室に入つて少し休んだ。時計を見ると、もう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたが、こゝでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中の爐では、木の枝を焚いてゐた。その煙が非常にけむくて、目から涙がぼろ／＼と落ちた。やはり目が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて、別室のや



富士山八合目の石室

うに仕切つて泊つてゐた外人の一群は、もう起きてゐた。頂上で御來迎を拜まうとするならば、そろ／＼こゝを出なければならぬ頃だ。いつの間にか爐の傍に横になつて眠つてしまつてゐた強力の青年を喚起して、私たちは又登り始めた。

山に酔つたといふよりも、睡眠を奪はれたためであらう、頭がふらく／＼する。さういふ者が私の外に一人二人あつた。自分は蘆を山の勾配のまゝに砂の上に敷いて、ごろりと寝て見た。砂の上には草一本の影もない。月はちやうど額の上に懸つて、いよ／＼天心に澄みきつてゐる。頭をずつ

北斗七星



と仰向けにした視線の果に、北斗七星がきら／＼と光つてゐる。私はその一つをじつと見つめてゐた。と、その星がふらく／＼と動き始める、すうと流れるのではなく、小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だなと思つて、他の一つの星を見つめた。すると、その星も亦螢のやうにゆらゆらと舞ひはじめた。これは幻覺だ。さう思ふと、眼の疲労の甚だしいことがわかつた。また月を見た。月の光がまぶし過ぎて、涙がにじみ出た。

九合目には久須志神社といふお宮がある。そこへはいつて暫く休んだ。神職が二三人なかく／＼寒い。しかし今朝

は氷がはらないから。――などと、もう朝の言葉をかはしてゐた。さうして、私たちには、「こゝは日の御子といつて、東へ眞正面の處です。こちらで御來迎をお拜みなさい」といつたが、日の出までにはまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を指すことにした。「頂上へ行く方は御祓をして、いらつしやい。」神職はかういつて、祝詞をあげてくれた。それは、今日のよき日にお山へ詣でる善き人々の一族の平安を祈るといふ意味を、上代の言葉を集めて綴つた長いものであつた。



久須志神社

そして、大きな御幣で、皆の並んで下げた頭の上をばさり、ば
さりと被つた。外へ出ると、これまで感じなかつた風が冷
え冷えと動いてゐた。それが黎明の近いことを思はせた。
又その風が、ふらくした頭を幾分かしつかりとさせてく
れた。

月の光は漸く衰へ始めた。その上、路が東へ廻つた爲、西へ
傾きかけた月が、頂の峯の陰になつてしまつた。光と影と
の差別は薄らいで、裾野の夕に見たやうな混沌とした青白
い色が、一様に漂つて來た。その混沌たるものの中から、新
しい光の生れるのを待つばかりになつた。下界は——殊

勾玉



山中湖

山梨縣南都留郡
福地村上吉田の
東南八軒なる中
野村にある

五湖

本栖湖

精進湖

西湖

河口湖

山中湖

五湖附近



に甲州に寄つた方は——雲がびつしりと鎖してゐた。そ
の雲のはづれに、今までは雲と同じやうに白く見えてゐた
ものが、大きな勾玉の形をした湖
水であるといふけぢめも、やつと
明らかに認められた。それが山
中湖であつた。五湖の一として
見残したこの湖を、私たちはかう
して鳥瞰的に眺め得たのであつ
た。

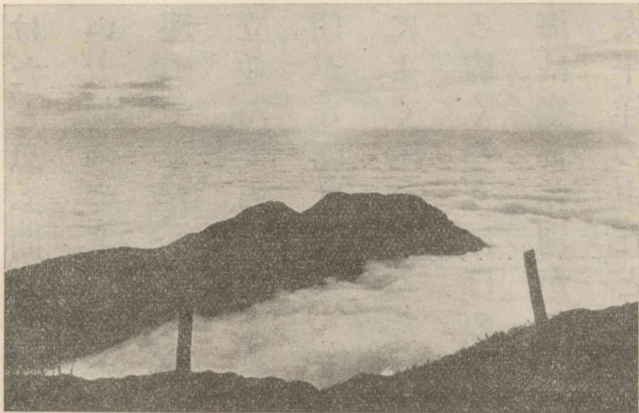


山中湖の鳥瞰

頂上の室ではもう灯を消してゐたが、屋根の下はうす暗か
つた。そこへ私たちは上つて、御來迎を待つことにした。

じつとしてみると、寒さはひし／＼と身に迫つて来る。手は凍え、吐く息は白く見えた。襦袢じゆばんを借りてかぶるものもあつた。下の室を早く立つて来たに見える人が、ちらほらと登つて来て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆草鞋のまゝで上るのだが、脚と脚と入れちがへて餘地のないやうな處へ、牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒な甘酒アマザケだけは、うまかつた。

暁紅——朝の始る前の先觸せんしゆくとして、かんがりとほかし染にせられる地平線の赤さは、かうした高みから眺める時には、たゞに美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つ



てゐるやうな純潔な尊さに、にじみ出てゐる。「あゝ、ぢきに

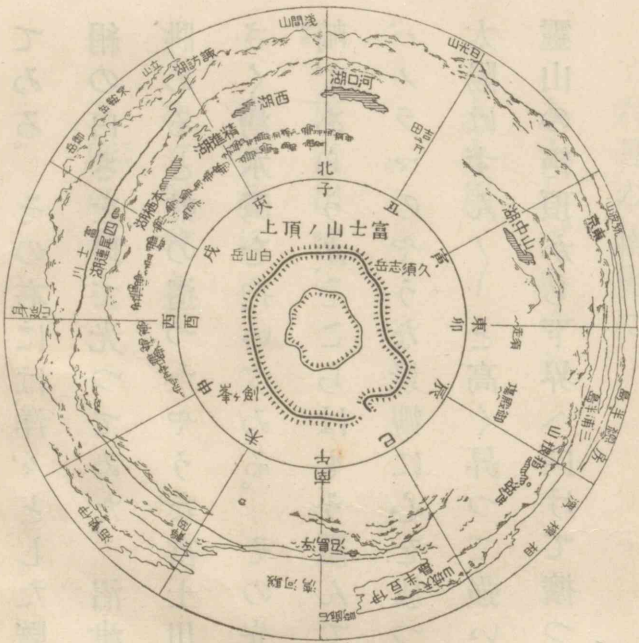
御來迎だ。」さういふ言葉が口々に傳へられて、室の中にゐた者も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には、霜がおりてゐた。それを踏んで、寒さうな緊張した顔が並んだ。

地平線の赤さはうつすりとして吸取られて、ある神聖なものの誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞が、つやつやしい光を帯びて来た——つと、一點輝いた朱の色が、

大島
伊豆半島の東方
海中にある島
三浦半島
神奈川県東南
方に突出てゐる
半島

江島
神奈川県南方
鎌倉の西にある
小島
馬入川
甲斐國(山梨縣)
桂川の下流
相模國(神奈川
縣)を貫流して
相模灘に入る
大磯
神奈川県中郡大
磯町
愛鷹山
富士山の南麓に
峙つ山
静岡縣駿東・富
士の兩郡に跨つ
てゐる

鋭い刃で突破つた皮膚から滴る血のやうに霞の幕を押分けたと思ふ間に、その朱の一點が見るく、ひろがつて、麗しい太陽の姿となつた。忽ち新しい光線は地上に、又天上に漲つて來た。その第一の光線はまつしくらに、この頂上に立並んでゐる私たちの瞳に届いた。朗かな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大地も實によく晴れてゐた。太陽を生んだ後の霞が消えた處に、煙の靡くやうにほのかに這つてゐるのは房總半島である。海は空と差別がないが、雲のやうに置かれた大島が、そこは太平洋の中だといふことを示してゐた。その手前に、更に鮮かに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島である。海岸



富士山の野中至の山ノバノマ
野中至の山ノバノマ
製圖

線に沿うて目を移すと、小さく、しかもしづかに江島が見える。馬入川が見える。その右手は大磯であらう。小田原・熱海と思はれるあたりも、箱根や足柄の山々も、盤に水銀を盛つたやうな蘆湖が外輪山の器の中に秘められてゐるのも、手に取るやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆

天城山
伊豆半島の中央部に峙つ山

三保松原
静岡縣安倍郡にある名勝
御前崎
駿河灣の西南に突出た岬

パノラマ

Panorama

三木露風
名は操
詩人
明治二十二年(三
西九)兵庫縣生

起を隔てて、天城山を中央とする伊豆半島が、すうつと延びてゐる。その右には、洋々とした駿河灣が描き残された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津・原・田子浦と順々に南を眺めると、蛇の這つたやうな富士川を越えて、三保松原が小さく清水灣を抱いてゐる。その先に突出てゐるのは御前崎であらうが、そこらはもう霞んでゐる。私はこの大きなパノラマのやうな景觀に心を放つてゐた。太陽はずん／＼と高く昇つて、強い、とろ／＼とした光線が、靈山の絶頂から下界へ向けて擴つていつた。(山水巡禮)

一八 旅

三木露風

さくら散る
六月の陸奥に、
ふかれてあゆむ
人と馬。

旅に出で、
南と北に
めぐり會ふ
三度の春よ。
都には

衣川
岩手縣の川
平泉で北上川に
入る

二兒へ

明治四十一年一
月十三日作者が
自ら認めて神奈
川縣小田原在酒
匂に轉地中の二
兒に贈つたもの

大町桂月

名は芳衛

文章家

土佐國(高知縣)

高知生

大正十四年歿

年五十七

伊澤先生

名は修二

教育家

貴族院議員

樂石社を起して

吃音矯正の事に

力めた

信濃國(長野縣)

生

大正六年薨

年六十七

夏ごろも

はや匂へるものを、

あなさびし、われはゆく、身に染みて。

棧道の日照雨

霽るゝと見れば、

しらゝゝと見えきたる

衣川。

(青き樹かげ)

一九 二兒へ

大町桂月

毎々手紙をくれて嬉しい。伊澤先生が二十日まで居

るがよからうとのお手紙ゆゑ、そのつもりで大いに勉
強するがよい。十五六日頃、ちよつと行くかも知れぬ
が、二十日には必ず迎へに行く。土産物はその時ゆつ
くり買つてよからう。

先生よりのお手紙に、「決して父の眞似をしてはならぬ」といふことをお前たちに誓はせるとのことゆゑ、そのつもりで、先生のおつしやることを承るがよい。この父の吃音の眞似をさせたくないことは言ふまでもない。その外、父には缺點もあり、悪癖もある。世上どんな人でも長所と短所とがあるものだ。然るに人は他人の短所には氣づき易いが、他人の長所には氣づきに

餓ゑては
飢ウル者ハ食ヲ
爲シ易ク、渴ク
者ハ飲ヲ爲シ易
シ。(孟子、公孫
丑上篇)

くいものだ。この父は短所も多いけれど、男らしいといふ氣象は大いに持つてゐる。これはお前が年を取るにつれて分つてくる。文筆も決して人後には落ちぬ。この二點は大いに眞似てよい。
「餓ゑては食をえらばず」と古の人は言つた。お前は肴が嫌だが、餓ゑたら必ず食へる。嫌でも食つてゐれば、終にはすきになる。何かの鐘詰でも送ることはわけも無いが、それでは却つてお前たちのためにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行したり、人の家にいったり、その他いろいろの時にこまる。人は食物にすききらひがあるやうに、萬事氣隨氣儘になり易い。氣隨氣儘で

は世は渡られぬ。何事もしんばうが大切だ。この事をよく心に留めておくがよい。今日は父も母も自せはしくて郵便局へ行けぬから、爲替は明日あたりおくる。(桂月全集)

二〇 花火

岡本綺堂

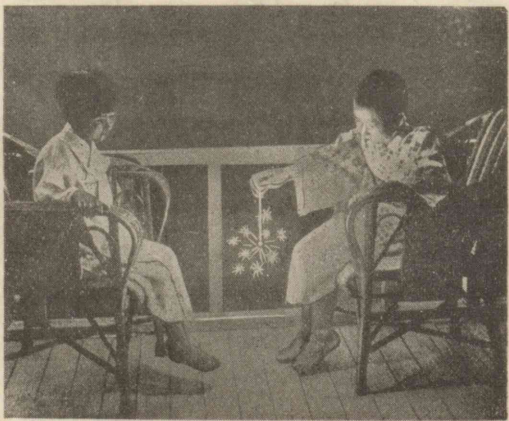
岡本綺堂
名は敬二
劇作家
明治五年(三三)
東京生

わたしの子供の頃には、花火をあげて遊ぶ子供たちが多かつた。夏の長い日もやうやく暮れて、家々の水撒も一通り済んで、町の灯がまばらに燦めいてくると、子供たちは細い筒の花火を持出して往來に出る。そこらの涼み臺では團扇の音や話聲が聞える。子供たちは往來の眞中に出るの

もある、うす暗い立木のかげにあつまるものもある。さうして、思ひくゝに花火をうち揚げる。もとより細い筒であるから、火は高くあがらない。せいとくが二階家の屋根を越えるくらゐで、ほんと揚るかと思ふと、すぐに開いてすぐに落ちる。まことに單純な、まことにあつけないものではないが、うす暗い夜の町で、そこにもこゝにもこの小さい火の飛ぶ影を見るのは、一種の涼しげな氣分を誘ひ出すものであつた。

白地の浴衣を着た若い娘が蟲籠をさげて夜の町をゆく。子供の小さい花火は、その行く手を照らすかのやうに低く飛んでゐる——かう書くと、それは繪であるといふかも知

れない。しかし私たちの子供のときには、かういふ繪のやうな風情はめづらしくなかつた。繪としては勿論月並の畫題でもあらうが、さて實際にさういふ風情を見せられると、決して悪くは感じない。まはり燈籠、組みあげ燈籠、蟲籠、蚊いぶしの煙、西瓜の截賣、かうしたものが都會の夏の夜らしい氣分を作り出すとすれば、子供たちの打ちあげる小さい花火も、たしかにその一部分を擔任してゐなければならぬ。



火 花 香 楸

花火には、普通の打揚のほか、鼠花火、線香花火のあることは説明するまでもあるまい。鼠花火はいたづら者が人を嚇してよろこぶのである。線香花火は小さい子供たちをよろこばせるのである。そのほかに幽霊花火といふものもあつた。これはお化花火ともいつて、鬼火のやうな青い火が、唯とろ／＼と燃えて落ちるだけであるが、いたづら者は暗い板塀や土藏の白壁の陰に隠れて、蚊に食はれながらその鬼火を燃して、臆病者の通りかゝるのを待つてゐるのであつた。

学校の暑中休暇の仕事は、勉強するのでもない、避暑旅行に出るのでもない、活動寫眞にゆくのもない。晝は泳ぎにゆくか、蟬やとんぼを追ひまはしに出るかするが、夜はきつと花火をあげに出る。こんなにして育てられた自分たちの少年時代を追懷して、わたしは決してそれを悔まうとは思はない。

その時代にくらべると、今は世の中がまつたく變つてしまつた。大通には電車が通る。横町にも自動車や自転車が駆けこんでくる。警察官は道路の取締に忙しい。春の紙鳶も、夏の花火も、秋の獨樂も、だん／＼に子供の手から奪はれてしまつた。今でも場末のさびしい薄暗い町を通ると、とき／＼に昔なつかしい子供の花火を見ることもあるが、現代の子供たちは、恐らくこの花火に對して、その昔の私た

花火間もなき
一兩が花火間も
なき光かな
(其角)

兩國式の花火
毎年七月二十日
前後東京隅田川
兩國橋の附近で
うちあげる大仕
掛の花火
俗に川開といふ

ちほどの興味を持つてゐないであらうと思はれる。「花火間もなき光かな」といつて、昔から花火ははかないものに歌はれてゐるが、そのはかないものはかない運命も、やがては全くほろび盡くして、花火といへば兩國式の大仕掛の物ばかりであると思はれるやうな時代が来るであらう。どんなに精巧な螺旋仕掛のおもちやが出来ても、あの粗末な細い竹筒が割れて、あかい火の光がぼんとあがるのを眺めてゐた昔の子供たち



兩國の川開



花火

秋花の風情

の愉快と幸福とを想像することは出来まい。
花火は夏のものであると私はいつた。しかし秋の宵の花
火もまた一種の風趣がないでもない。鉢の朝顔の蔓がだ
んだんに伸びて、朝夕はもう涼風が單衣の襟にしみる頃、ま
だ今年の夏を忘れ得ない子供たちが、夜露のおりた町に出
て未練らしく花火をあげてゐるのもある。勿論、その火の
数は夏の頃ほどに多くない。秋の螢——さうした寂しさ
を思はせるやうな火の光がところ／＼に揚つてゐると、暗
い空から弱い稲妻が時々落ちて来て、その光を奪ひなが
ら共に消えてゆく。子供心にも言知れぬ淡い哀愁を誘ひ
出されるのは、かういふ秋の宵であつた。
(隨筆集—猫やなぎ)

大類 仲

歴史家

文學博士

東北帝國大學教

授

明治十七年(西

巴)東京生

ベニス

ボ

ー

Venice

Po

伊太利北部
の東流してア
入る

海に

リヤルト

Rialto

二二 水の都

大類 仲

ベニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。この都は北伊太利の沿岸で、ボーの河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居り、又海に向つては長く斗出した海峡によつて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城郭の様なものだ。街はその潟の中央なるリヤルトの島に置かれてゐる。中世の初、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れてこの險要な潟に據つて、こ

こで漁業を營むことになつた。これがベニスの草分である。この地は軍事上險要な地であつたばかりでなく、その潟は少からぬ魚鹽の利を藏してゐた。ベニスの住民が追發達したその資源は、これらの利に依つて得たものである。それのみでなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つてゐたので、遂には中世第一の商業市といはれるばかりの盛況を呈するに至つた。ベニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに安全な生活を營むことが出来、水あればこそ魚鹽の利を收めることが出来、水あればこそ更に四方に航海通商を試みる事が出来たのだ。その美しい風景も、

全く水の賜に外ならぬ。かくの如くにして、ベニスは全く水から生れたやうなものだ。ベナスの女神は水に浮ぶ泡から生れたが、ベニスの都も亦それに似たものといへよう。初め都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコーにあつたが、後に潟の中央なるリヤルトの島に移つたのである。今はこの島全體が都となつて、その間を縦横に多數の運河が通じてゐる。そして人はこの水の通りをゴンドラと呼ぶ古風な小船に乗つて往來する。多くの人家は直に水に臨んでゐるから、戸口の石段は水に洗はれ、ゴンドラの船は直にこの戸口に着けることが出来る。

ベナス

ローマ神話
中にある女
神

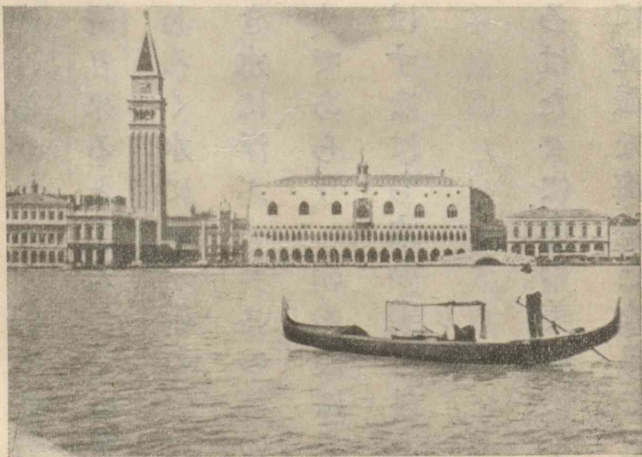
マラモッコー

Malamocco

ゴンドラ

Gondola
ベニス特有
の半月形
の小舟

る。他の都市では、けたまほしい自動車の警笛や、敷石を軋る轍の音で喧しいのに、ベニスでは、水を分けゆく静かな櫂の音が聞えるのみだ。文明の進歩した今日、かくの如き都市は、實に世界に稀である。あゝ水に浮ぶベニスの都、寺院に宮殿にその榮華を語る大廈高樓が、色さまざまの大理石に時代の古びを見せて、一灣の水、晝の静けさに眠る上に、蜃氣樓と見紛ふばかり浮び出ると



ラドンゴのスニベ

アドリヤ海
Adriatic Sea
イタリー半島の東にある海

小亞細亞
Asia Minor
アシアの西部
シリヤ
シリア
小アジアの南部
Syria
地中海の沿岸
埃及
Egypt
アフリカの東北部

き、或は夕日に赤く彩られた眞帆片帆の滑らかな水面をたゆたふとき、或は又遠く銀波の靡けるがごとく、瀉の彼方を限る洲崎の間を分けて漁船の歸り來るとき、若しくは月靜かなる夜、ゴンドラの船歌おもしろく、水に映る街の燈火を權のさきにかき亂して行くとき、水に浮ぶベニスの都の美しさは、如何に遊子の心を動かすであらう。朝の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬、ベニスの美はすなはち水の美に外ならぬ。しかしベニスの水に負ふところは、たゞにその美觀のみではない。ベニスは實に水の爲に立派な海港となることが出来たのだ。即ちその住民は、水を利用してアドリヤ海か

ら遠く東に航し、小亞細亞・シリヤ・埃及の沿岸にも通商貿易を試みた。随つてアドリヤ海はベニスの爲には貴重なものであつて、これがなければあのやうな發達は到底望まれなかつたのである。さればこそ、當のベニス人は、アドリヤ海をベニス市の夫と見立てたのである。都を妻とし、海を夫とする、なんと美しい想像ではないか。ベニスが繁榮を極めた時代には、以上の想像に基づいて、こゝに昔ゆかしい儀式が行はれた。即ちベニスの町とアドリヤ海との結婚式である。それは市民が行ふ儀式の中で最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づつ行はれた。この日ベニスの長官は自ら花を飾つた政府の大船に坐乗し、後には多數の貴族の船

を従へ、美々しい行列をつくつて悠々と海上に漕出した。かくて長官はベニス市を代表して黄金の指環を海中に投じ、アドリヤ海と千年の契を籠めるのであつた。夫アドリヤ海と妻ベニス。一は人間の作つたもの、一は自然そのもの。自然なる海の夫は朝夕の潮の満干に洲崎の岸を洗ひ、リヤルトの島をおとづれて、千秋萬古何のかはりもないが、人間の作つた街の妻はその容姿が日に月に衰へて、今は當時の面影さへ見ることが出来ない。思うてこゝに至れば、誰しも多少の感慨なきを得ぬであらう。

(ヴェニスとフロレンス)

ベッカストリニ

Beccastrini

松村武雄

神話學者

文學博士

浦和高等學校教

授

明治十八年(二五)

伊太利

ヨロッパ

南部の王國

フロレンス

Florence

イタリー中

部の都會

ミラン

Milan

イタリー北部の都會

ベッカストリニ

松村武雄

歐洲戦争では各國の間に多くの勇士が現れた。伊太利のベッカストリニの如きは、そのうちでも最も花々しい勇士であつた。

ベッカストリニ



ベッカストリニは伊太利のフロレンス附近の貧しい家に生れた。彼は歐洲戦争の始るまでは、坑夫として炭坑

に働いてゐた。しかし戦争が始る二年前、即ち一千九百十二年の秋に、ミランの工兵聯隊に入隊した。その時、彼は丁度二十歳であつた。

奥地利
Austria
ヨーロッパ
中部の共和

彼の屬してゐた工兵聯隊が派遣されたのは、敵國奥地利の國境に程遠からぬパスビヨ山附近であつた。この山は峨峨たる岩山で、樹木などはあまり生えてゐない荒涼たる秃山であつた。

彼の聯隊はこの山を隔てて、奥地利の敵軍と睨み合つてゐた。だから戦闘はいつでも塹壕や坑道の中で行はれた。こゝは全山が岩から成立つてゐるので、塹壕を掘ることも、坑道を造ることも、一通りの骨折では出来なかつた。彼の聯隊は、絶えず強い火薬を使つて、岩山を爆發させねばならなかつた。かくて彼の聯隊は、いつしか爆發隊といふ名で通るやうになつた。

ベツカストリニの前身は炭坑の坑夫である。だから、彼は塹壕を掘るにも、坑道を造るにも、人一倍すばしこく、目ざましい働をした。彼のさうしたすばらしい働は、やがて上官



世三第ルエヌマエ、ルトクビ

の目にとまつた。一日ベツカストリニは上官の前に呼出された。彼は何事が起つたかと思つて、心配しながら不動の姿勢で上官の前に突立つた。上官は機嫌のよい顔をして、黙つて彼に一枚の紙を渡した。それはベツカストリニを少尉に任ずるといふ辭令であつた。

皇帝
Victor Emmanuel III
(1869—)
ビクトル、
エマヌエル、
三世
一九〇〇年即位

レコード
Record
記録

「お前の働は大したものだ。で、皇帝陛下はお前を少尉に昇進させて下さつたのだ。今後は一層精出すやうに。」上官は嚴かな口調で、かう傳へた。ベッカストリニは夢ではないかと思つた。一兵士が一足とびに將校になるといふことは、これまでにないことである。伊太利陸軍は今までのレコードを破つて、一兵士を少尉に任用しようとしたのであつた。

ベッカストリニは本當に夢のやうな心持がした。彼は嬉しくてたまらなかつた。が、「しかし」と、ベッカストリニは考へ始めた。「自分は文盲である。手紙一本も、ろくに書けぬ男である。自分のやうなものが將校の列に入るのは、自分

だけの恥ではない、伊太利陸軍の不名譽である。嬉しさのあまりに光榮ある伊太利の陸軍を汚してはならぬ。」ベッカストリニは、かう思つた。そこで、きつぱりした口調で、上官に、

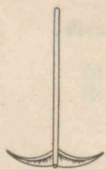
「有難い仰ではありますが、私は御辭退申します。」と言つた。上官は非常に驚いた。そして、ベッカストリニの顔を睨みつけるやうにして、
「なに、辭退する。それはまたどういふわけか。」と詰つた。

ベッカストリニは、しづかに自分の考を話した。そして、自分が將校になつてもよいだけの修養が出来た曉に、改めて

辭令をお受けすると言つた。上官は感に堪へないやうな顔をして、そのまゝ黙つてしまつた。

それからといふものは、ベッカストリニはもう死物狂であつた。彼はパスビヨ山の塹壕の中で、一生懸命に語學を勉強した。晝夜の別なく火藥を使つて岩山を爆發させたり、鶴嘴を搦んで地を掘つたりするのだから、身も心も打ちのめされたやうに勞れ果てるのであるが、ベッカストリニは氣を取直しては、戦のひまづくにABCから稽古を始めた。世に熱心ほど恐しいものはない。殆ど無學文盲であつたベッカストリニは、數年たゝぬうちに伊太利の文壇にもてはやされる文章を作るやうになつた。

鶴嘴



Gelatine
ゼラチン

ベッカストリニはとう／＼隊長の代理として多くの兵士を指揮する身分となつた。その頃のことである、ベッカストリニは、一日部下を呼んで烈しい爆發藥の調合を命じた。そして自分はその側にあつて、仕事の監督をしてゐた。と、一人の兵士が、何を間違へたのか、くらく／＼と煮えたつてゐる鍋の中にゼラチンを入れた。

「あつ、しまつた。」

ベッカストリニは、かう叫んで、いきなり飛出した。そして大きな聲で、そこに群がつてゐた部下に、

「逃げろ、大爆發だ。」

と叫んだ。部下の兵士たちは弾かれたやうに、ぱつと飛びのいた。
 ベッカストリニは飛鳥のやうに身を躍らせて、鍋を掴むなり、谷底めがけて、どうと投落した。が、もう遅かつた。鍋はベッカストリニの手を離れた瞬間に、凄じい響を立てて爆発した。ベッカストリニは聲をも立て得ないで、地面にぶつ倒れた。あゝ、何といふ光景だ。彼の眼は二つともぐぢやぐぢやになつた。左の腕は肩の處から根こそぎ挽ぎとられた。そして、右の手先はさゝらのやうに無慚に裂けて、からだはすつかり不具になつた。しかし大勢の部下は、彼の命がけの働によつて救はれたのであつた。

Typewriter
 タイプライター

ベッカストリニは、思ひがけない不具者になつてしまつたので、除隊となつて傷兵院に收容された。傷兵院に入つても、ベッカストリニは決してむだに日を送ることはなかつた。彼はまづタイプライターを打つことを稽古し始めた。彼の左の腕は肩から挽ぎとられた。右の手先もぐぢやぐぢやになつて、やつと二本の指が残つてゐるだけである。彼はこの二本の指を使つて根氣よくタイプライターをたたいた。間もなく、ペンで書くよりも迅く且正確に打てるやうになつた。そして彼の名の署せられた立派な文章が、ぽつ／＼名高い雑誌や新聞に現れるやうになつた。
 「あゝ、ベッカストリニ。」

世人は彼の名を見ると、すぐにかう言つた。この簡単な言葉のうちには、ベツカストリニの赫々たる勳功に對する讚歎と、その不幸な運命に對する同情とが溢れてゐた。

一千九百十七年の五月、傷病兵に對する勳功表彰式がローマで行はれた。式は非常に盛大であつて、皇族を始め、内閣諸大臣が悉くこれに列席した。

言ふまでもなく、ベツカストリニはその花形であつた。數ある傷病者のうちでも、ベツカストリニほど勇敢に働き、ベツカストリニほどひどい傷を被つたものは少い。彼は最も名譽ある勳功者の一人として、その日晴の表彰を受ける

ローマ
イタリーの
首府
Rome

ことになつてゐた。

式は傷病院の内で行はれた。院内はいろくくの準備でたいそう込みあつてゐた。役員たちはみんな興奮しきつて、紅い顔に眼を光らしながら、忙しくあちらこちらに走りまはつてゐた。

ベツカストリニは式場に出ようとして、靜かに支度をした。服装がととのふと、さあ、これで用意が出来た。と獨言をいつて、最後に靴をはかうとして、あたりを探つた。しかし靴は彼の手に觸れなかつた。彼は少しあわてて忙しく手を動かした。それでもやはり靴は見つからなかつた。そのうちに式の時刻はだんく追つて來た。彼は氣をい

らつて、しきりに従卒の名を呼續けた。どうしたものか、従卒はなかく、やつて來なかつた。ベツカストリニは困つた顔をして、黙りこんだ。

と、廊下に少年の聲がして、

「君、何か御用ですか。」

といふ。ベツカストリニは聲のする方に見えぬ眼を向けて、何氣なく、

「僕は靴をはきたいのですが――」

と言つた。すると、少年はつかく、とベツカストリニの側に歩み寄つた。そして、「では、僕がはかせてあげませう。」と、まめまめしく靴をはかせた。そして紐を結びながら、「これで

いかゞです。」と言つてゐるところへ、大勢の人が通りかゝつた。人々は驚いて叫んだ。

「殿下、こゝにいらつしやいましたか。」



子太皇國-リタイ

あゝ、ベツカストリニの爲に靴の紐を結んだ少年こそは伊太利の皇太子殿下であつたのである。それを知つた時のベツ

カストリニの驚愕と感激とは、どうであつたらう。やがて式が始つた。多くの傷病兵は熱意の籠つた表彰の辭と共に、勳章をいたゞいた。ベツカストリニは特に高級の勳章を授けられた。その勳章が枯木の枝のやうな彼の二本指

にかけられた時、さやくと衣ずれの音がして、誰やら彼のそばに歩み寄つた。彼はそのしとやかな足音と、あたりの物々しいけはひとで、位高い女性がお出でになつたことを



后太皇タリゲルマ

感じた。と、一人のものがマルゲリタ皇太后陛下であると注意してくれた。ベツカストリニは電氣に撃たれたやうに、肅然として身を正した。皇太后

陛下は静かに仰せられた。

「あなたの事は残らず聞いてゐます。あなたが新聞や雑誌に發表された文章も皆読んでゐます。聞けば、その手

でよくタイプライターを打たれるさうですが、今日晴の場所で打つて見せて下さいませんか。」

やがてタイプライターがベツカストリニの前に運ばれた。皇太后陛下はベツカストリニの後に立つて、その肩に片手をかけながら、肩越しに紙面を覗きこんでゐられた。ベツカストリニは機械に二本の指をかけながら、暫く身動きもしなかつた。

「どんな文字が現れるだらう。」

満場の人々はかう思つて、固唾を呑んで控へてゐた。寂として聲なき中に、ベツカストリニは興奮しつゝ、打つべき文句も容易に頭の中に浮んで來ないやうであつた。

見よ、二本の指は忽ち稻妻のやうにはやく動き出して、その音が續けざまに場内の空氣をふるはせた。人々は覺えず目を見はつた。見る間に、紙の上には、
「陛下よ、臣は陛下の殊恩に感泣す。」

といふ文字が現れた。打ちをはると、ベッカストリニの空洞のやうな兩の眼から、熱い涙がはら／＼とこぼれた。彼は黙々として涙に濡れた顔を紙の上に伏せた。すゝり泣の聲がそこ／＼に起つた。(童話の研究)

〇三三 專心

萩野由之

精深微妙の眞理を究むといふ高尚なる學問はいふまでも

萩野由之

國史學者

文學博士

東京帝國大學名譽教授

佐渡國(新潟縣)生

大正十三年薨

年六十五

心こゝに

心コ、ニ在ラザ

レバ、視レドモ

見エズ、聽ケド

モ聞エズ、食ヘ

ドモ其ノ味ヲ知

ラズ。(大學)

山本勘助

武田信玄麾下の

勇將

永祿四年(三三)

戦死

年六十九

武田

武田信玄及び勝頼

なし。わづかに一技一藝の上手といはれんだにも、その心を潜めず放埒に明し暮しては、事の成らんこと覺束なし。苟も師父の教を受け、先輩の講説を聞くに當りては、先づその放心を收めんこと最も肝要なるべし。若し空を渡る鴻鵠に心を馳せ、門を過ぐる車馬に目を奪はれなば、心こゝにあらずして、視れども見えず、聽けども聞えざるべし。いかで學業の成るを望むべけん。何事にも古人を學ぶといふは僻説なるべけれども、その善きものは選んで師とすべし。今、古人勉學の一端を擧げて、反省の助となさん。戦國の頃、山本勘助晴幸とて、甲斐の武田の臣にて軍略世に

天目山

山梨縣東八代郡にある山
天正十年(三三三)
武田勝頼がこゝで自殺し、武田氏は滅びた
天和(徳川の初) 靈元天皇の御代(三三三—三三三)
北村季吟 名は信澄、父助江戶中期の國學者 近江(滋賀縣)の人 寶永二年(三三五)卒 年八十二 贈從四位

源朝臣湖目折 坂草子春暁折 和文、漢文 佛敎

すぐれたる人ありき。嘗て衆人の中にて軍事の物語しけるに、その席に小宮山助太郎、小山田八彌、秋山友市といふ三人の小兒ありき。小宮山はうづくまりて謹聽し、八彌は笑語し、友市は度々座を立ちぬ。勘助人に語りて曰く、「助太郎は必ず事を濟すものならん。二人は決して用には立つまじきものなり。方々よくその行末を檢せられよ」と。後に武田氏衰へて勝頼、天目山に敗北せしとき、果して二人は出奔し、助太郎は君の勘當蒙り居たりしかども、遂に殉死せり。世に小宮山内膳友信といへるは、この助太郎が後の名なりとぞ。又天和の頃、北村季吟は歌連歌の上手にて、後に幕府に召出

花の下 連歌の一派

湖春 北村氏 季吟の長子 歌人 花果院法眼と號した 元祿十年(三三七) 年五十 歿



北村季吟 栗原脚庵筆

され、歌學方となりて新に家を興しし近代の學者なり。この人初め花の下の宗匠となり、聖靈會の百韻しける席に、その子湖春十四五歳ばかりなるが侍りけるに、つと立ちて厠に行かんとせり。季吟怒りて、「やよ悴、汝連歌に身を入れて居垂れにしたりと人にいはれんは、道に於て恥にあらず。かゝる席にて中座せんは、いみじきうつけ者ぞ」と、いたく誡めたりとかや。何れもその道に心を入れて他意なきことかくの如くならざれば、世に勝れたる堪能にはなり難きを誡めたるなり。

伊藤東涯

名は長胤

仁齋の長子

京都の儒者

元文元年(三九六)

卒

年六十七

贈從四位

道を學ぶ者

東涯の著「辨疑録」に見えてゐる

安井息軒

名は衡

仲平はその字

息軒は號

日向飯肥藩士

幕末の儒者

明治九年(三五〇)

卒

年七十八

贈從四位

森鷗外

名は林太郎

醫學者・文學者

醫學博士・文學博士

陸軍軍醫總監

東京帝室博物館

高瀬 即興詩人 記

汝等苟も名を成さんと思はば、こゝに深く思を致すべきものぞ。伊藤東涯が「道を學ぶ者は、孤軍大敵に臨み、單身重圍に陥りしが如く、一尺を進むとも一寸を退くこと勿れ」といひしは、實に思慮ある言といふべし。

二四 安井息軒

森

鷗外

外

「仲平さんはえらくなりなさるだらう」といふ評判と同時に、「仲平さんは不男だ」といふ陰言が清武一郷に傳へられてゐる。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては

宅地を少し離れたところに田畑を持つてゐて、年來家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにあつたのである。



安井息軒

しかし仲平の父は三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してかき置いて、四十の時歸國してかき置いたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせる

ことにしてゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、仲平が六つの時、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた

父

名は朝宗

字は子全

號は滄洲

文化六年(四九九)

歿

年六十餘

飯肥

日向國(宮崎縣)

南那珂郡にある

町

飯肥の舊藩主は

伊東氏

後、兄弟の背丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懐中して畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。父が始めて藩の教授を命ぜられた頃のことである、十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道で行逢ふ人が、皆言合はせたやうに二人を見くらべて、連があれば連に何事をかさゝやいた。背の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、背の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合に見えたからである。兄弟同時にわづらつた疱瘡が、兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕あばたになつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時疱瘡して片目になつてゐるのに、又仲平が同じ片目になつたのを思へば、偶然辭様とい

技巧
ふものも残酷なものだといふ外はない。

旅行中心得

筆蹟
旅行中心得の條々
道筋に名所古跡あらは必ず見物すへし疲れたりとて見ざれば後に悔る事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の實なり假にも人と争ふ心あるへからず武藝の試合は勝負を重する故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るましき事
丑正月望前一日 半九齋

旅行中心得條々
道筋に名所古跡あらは必ず見物すへし疲れたりとて見ざれば後に悔る事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の實なり假にも人と争ふ心あるへからず武藝の試合は勝負を重する故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るましき事
丑正月望前一日 半九齋

安井息軒筆

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで朝は少し早めに食事を済ませて、一足先に出て、晩は少し居残つて仕事をして、一足後れて歸つて見た。しかし行逢ふ人が自分の方を見て連とささやくことは止まなかつた。そればかりではない、兄と一緒に歩く時よりも、行逢ふ人の態度が餘程無遠慮になつて、

さ（やく）やく（聲）聲も常より高く、中には聲をかけるものさへある。

「見（見）い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに。猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

仲平に先だ（先）つて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修業に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借りて自炊（炊）をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、これを飯の菜にしたのを、藏

篠崎小竹

名は彌

大阪の儒者

嘉永四年（三五二）

卒

年七十一

贈從五位

古賀侗庵

名は煜

精里の第三子

佐賀の人

昌平饗の儒者

弘化四年（三五七）

歿

年六十

昌平饗

昌平坂御學問所

幕府の學校

今の本郷區湯島

にあつた

松崎慊堂

名は復

掛川藩の儒者

肥後生

弘化四年（三五七）

卒

年七十四

贈正五位

林大學頭

林

屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが「あれでは體が續くまい」と氣遣ふほどであつた。中一年おいて二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、とかく病氣で、とうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

その後、仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平饗に入つた。後世の註疏に據らず經義を究めようとする仲平の爲には、古賀より松崎慊堂の方が懐かしかつたが、昌平饗に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、背の低い

田舎書生は、こゝでも同窓に馬鹿にされずには済まなかつた。それでも仲平は無頓着に黙りこんで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、

からかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音をしのぶが岡の時
鳥いつか雲居のよそに名
のらむ

と書いてあつた。



聖堂講釋
史料編纂掛藏

しのぶが岡
上野の岡
もと聖堂のあつ
た處
元祿四年(三五)
本郷區湯島なる
今の地に移され
た

「や、えらい抱負ぢやぞ」と、友だちは笑つて去つたが、腹の中では稍、氣味悪くも思つた。これは仲平が十九の時、漢學に全

力を傾注するまで國文をも少々研究した名残で、わざと流儀違の和歌の眞似をして同窓の揶揄に酬いたのである。仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にされた。そして翌年藩主が歸國される時、供をして歸つた。

江戸がへり、昌平饗仕込と聞いて、仲平さんはえらくなりなされるだらう。と評判する郷里の人たちも、痘痕があつて、片目で、背の低い男振を見ては、「仲平さんは不男だ」と陰言を言はずには置かなかつた。

大儒息軒先生としてその名を知られるやうになつたのは、仲平が四十八の頃からである。(鷗外全集)

夏目漱石

名は金之助
英文學者・小説家
江戸生
大正五年歿
年五十

吾が輩

「吾輩は猫である」の主人公たる苦沙彌先生の飼猫の自稱

ボール

Ball

バット

Bat

二五 垣巡り

夏目漱石

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱くものがあるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つことが出来ない。だからボールもバットも取扱ふことが出来ない。次には金がなから買ふわけにいかない。この二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は、一文いらす器械なしと名づくべき種類に属するものだと思ふ。主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。縁側と平行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。吾が輩の創めた運動は、垣巡りといつて、この垣

の上を落ちないやうに一周するのである。これはやりそこなふこともまゝあるが、首尾よくいくと御慰になる。殊に處々に根を焼いた丸太が立つてゐるから、一寸休息に便宜がある。今日は出来がよかつたので、朝から晝までに三遍やつてみたが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。とうとう、四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列を正して止つた。「これは推參な奴だ、人の運動の妨をする。殊に何處の鳥だか籍もない分際で、人の塀へとまるといふ法があるものか。」と思つたから、「通るんだ、おい、退き給へ。」と聲

をかけた。眞先の鳥は此方を見て、にや〜笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて來たに違ない。



夏目漱石筆 猫

吾が輩は返事を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つてゐた。鳥は通稱を勘左衛門といふさうだが、成程勘左衛門だ。吾が輩がいくら待つてゐても、挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないから、そろ〜歩きだした。すると、眞先の勘左衛門がちよいと羽をひろげた。やつと吾

が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向から左向に姿勢を更へただけである。

この奴め、地面の上ならその分に捨置くのではないが、如何にせん、たゞさへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つてゐては足がつゝかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處には止りつけてゐる。随つて、氣に入ればいつまでも逗留するだらう。こちらはこれで四回目だ。たゞさへ大分疲れてゐる。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物がなくてさへ落ちんとは保證が出來ん

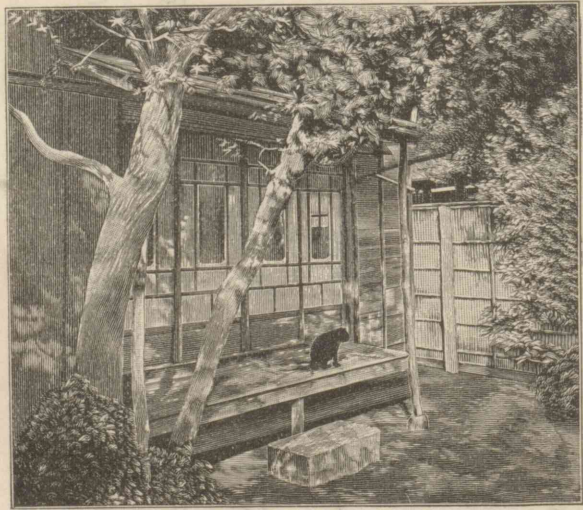
天狗



のに、こんな黒装束が三個も前途を遮つてゐては容易ならざる不都合だ。愈となれば、自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさうしようか。敵は大勢のことではあるし、殊には餘りこの邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子の様だ。どうせ質のいゝやつでないには極つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入をして萬一落ちてもしたら、尙更恥辱だ。

と思つてゐると、左向けをした烏が「阿呆」と言つた。次のも眞似をして「阿呆」と言つた。最後の奴は御丁寧にも「阿呆、阿呆」と二聲叫んだ。如何に温厚なる吾が輩でも、これは看過

出来ない。第一、自己の庭内で烏輩に侮辱されたとあつては、吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうといふなら、體面にかゝはる。決して退却は出来ない。諺にも「烏合の衆」といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据ゑて、のそくと歩き出す。烏は知らん顔をして、何か御互に話をしてゐる様子だ。愈、癩癩に障



夏の目漱石の宅

る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に合はせてやるんだが、残念なことには、いくら怒つても、のそくとしかあるかれない。漸くのこと、先鋒を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申しあはせた様にいきなり羽ばたきをして、一二尺飛上つた。その風が突然吾が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはづして、すとんと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見おろしてゐる。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。

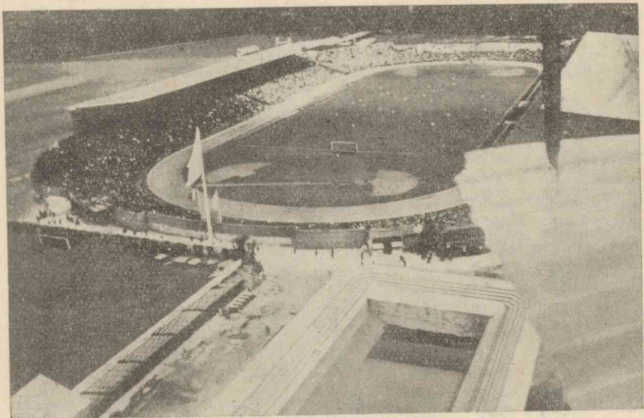
背を圓くして少々唸つたが、益、駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それがわるい。猫ならこれくらゐやればたしかにこたへるのだが、あいにく相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば、致方がない。機を見るに敏なる吾が輩は、到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

二六 スポーツマン 辰野 保

Sportsman
辰野 保
辯護士
大日本體育協會
理事
明治二十五年(二
五)東京生

レスリング
Wrestling
チーム
Team
組
組
團
體

リード
Read
リード



巴里のオリンピック大会会場

レスリングの日本選手として巴里の大会に出場した内藤克俊君は、アメリカの學生チームの優勝者でありました。彼は、アメリカの選手と共に佛蘭西に渡つて來ました。その船には、無論アメリカレスリング倶楽部の優勝者である彼のリード選手も同船して居ました。船中の朝夕な、二人の交情は次第に深くなりました。船中でも、内藤選手の左の人差指の怪我について、リード君は常に人一倍心配も

オリンピック村

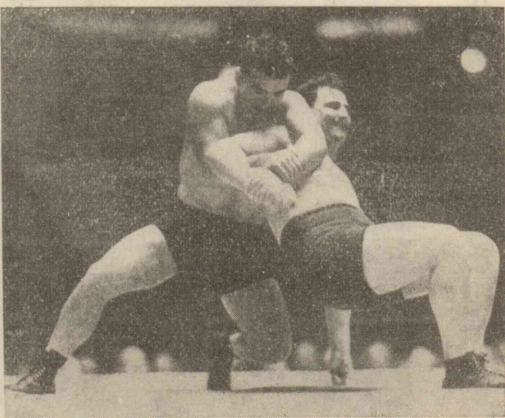
Olympic village
オリンピック村
大会に出場する選手
の宿舎を特
に或場所へ
まとめて作
つた所

オリンピック

Olympic
オリンピック
これが今の
オリンピック
大会の起
源である

オリンピック
競技
往古ギリシ
ヤで四年毎
にオリンピ
ヤ大祭を行
ひ五日間大
競技を行つ
た

し介抱もしてくれました。やがて巴里の大会に出ると、二人は豫想の如く連勝して、とうとう準決勝戦に於て相見ゆることになつたのであります。試合は最初から火花を散らして闘ひ、互に秘術を盡くした末、正規の十分間にあと二分といふ時に、内藤君は惜しくも敗れてしまいました。その夜の事です、リード選手はオリンピック村の日本選手合宿所を一人でたづねて來ました。内藤君の手を握つて、實に今日は辛かつた。君の左手



レスリングの夜

ゲーム 競技
 Game 競技
 ハンディキャップ 競技などで優者に物を負はせたり後れて出發させたりして競技者の優劣を平均させること
 Handicap

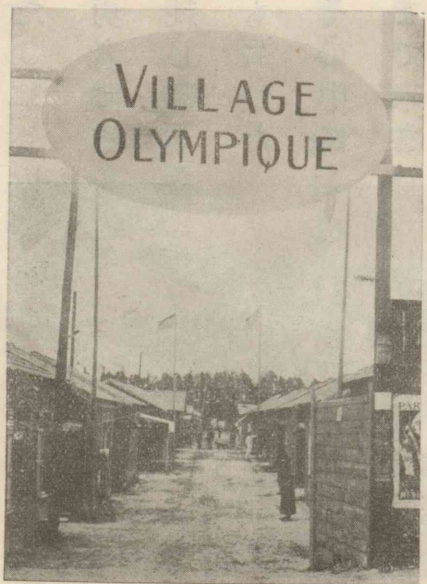
の負傷を自分はよく知つてゐる。今度のゲームの最初から僕は君と相會ふ日を苦に病んでゐた。君には大きなハンディキャップがあるのだ。自分は今日辛うじて君に勝つことを得たものの、心の中では親友のために絶えず泣いてゐた。この上は、僕は最後まで立派に戦つて、選手権をきつと自分の手に得よう。そして僕は自己の第一人者となることによつて、一方、米國のレスリングの名譽を輝かすと共に、又他方君の等位を上ぐることに努力する。と聲涙共に下る有様であつたといふ。アメリカにもこんなに優しい、いゝ選手がゐます。

日・華・比
 日本・中華民國・比律賓
 マラソンレース

Marathon race
 長距離競走
 現在のオリ
 ンピックで
 は廿六哩四
 分の一即ち
 約四三・四
 五哩を走る
 ことになつ
 てゐる

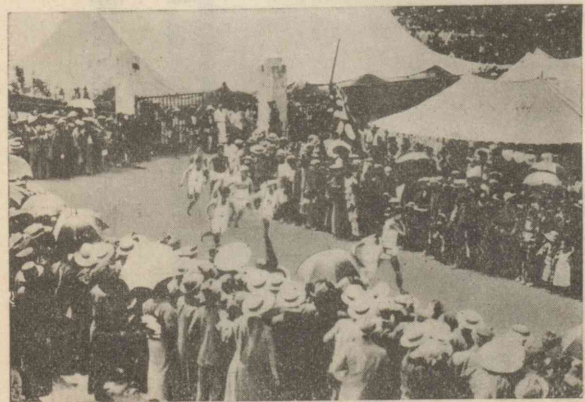
スタート
 出發
 Start
 スタートを
 切るとは出
 発すること

大正十二年五月、日・華・比三國の極東選手権競技大會が大阪で開かれました。日本軍の勢物凄く、既に優勝は確實でありましたが、最後の日に愈、呼物の二十六哩マラソンレースが行はれました。この競技に参加した一人に、岡山縣の長谷川照治といふ青年があつたのです。この日は雨上りの、實に蒸暑い日でありました。正午競技場にスタートを切つてから、長谷川君は、地方青年に見る一本



コース
道程
Course
スタジアム
競技場
Stadium

氣の眞面目さで、常に先頭をきつて廿六哩の長いコースを見事に走破しました。萬雷の如き歡呼の中に今やスタジアムに歸つて來ました。しかし不幸にして、この勇者はその時殆どその精力を消耗し盡くして、どうやら視力さへも失つたかの様でありました。その中に彼は競技場の半ばごろまで來ますと、俄に氣を失つてその場に打倒れてしまひました。折角こゝまで先頭を切つて來たものと、場を埋めた何萬の觀衆は、



マラソンレースの發出

野口源三郎
體育家
東京高等師範學
校教授

あと三百米ばかりに迫つた決勝點まで、何とかして走らせようとして、狂氣の如く、或はその名を呼び、或は激勵して柵外より聲援はしましたが、國際競技規則で競技者の身體に觸れることを絶対に禁じられてゐる以上、倒れ臥した長谷川君を再び起して走らせる方法は、到底見出すすべもなかつたのであります。丁度その時です、役員の一入野口源三郎君は、大急ぎで一本の日の丸の小旗を取來り、これを柵の中から倒れた長谷川君の眼の前に持つて行つて、長谷川君、日本の爲にやつてくれ。と言ひながら一振り振つたのでした。すると、今まで全く生氣を失つてゐた長谷川選手は、すつくと起上つた。そ

頼山陽

名は襄
修史家・漢詩人
天保三年(一八三二)
薨
年五十三
贈從三位

して野口君の日の丸の旗で指さす方に、彼はとぼくと走り出したではありませんか。見物は、この悲壯な光景を見て、ほんとに泣きました。彼は又倒れた。再び日の丸の旗は振られた。彼は又起上つた。そして三度倒れて四度目に起上つて、彼は遂に決勝點に入つたのであります。何萬の觀衆は、感に打たれてこの光景を正視する者はありませんでした。我々は今日も尙その當時を偲ぶと眼の底が熱くなるやうに感じます。我々は、この日こゝに眞の日本を見たのです。(スポーツ隨筆)

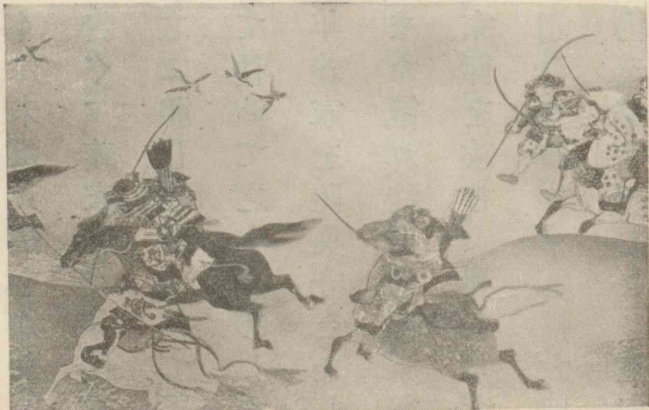
二七 八幡太郎 (原漢文)

頼山陽

源義家

頼義の長子
陸奥守
鎮守府將軍
天仁元年(一〇七六)
薨
年六十八
贈正三位
頼義
頼信の長子
陸奥守
鎮守府將軍
承保二年(一七五)
薨
贈正三位
安倍頼時
前九年役に於ける賊の首領
征戰九歳
いはゆる前九年役
藤原頼通
道長の子
關白太政大臣
承保元年(一七三)
薨
年八十三

源義家は頼義の長子なり。長ずるに及んで男山八幡の祠前に冠し、八幡太郎と稱す。人となり英果にして射を善くし、征行あるごとに未だ嘗て従はずんばあらず。陸奥の豪族安倍頼時及び其の子貞任等の叛するや、頼義朝命を奉じて之を討ず。義家父に従ひ、到る處縦横奮戦す。賊兵相警めて曰く、「八幡太郎なり」と。毎に其の鋭鋒を避く。征戰九歳、討伐功を奏して凱旋す。一日、義家、關白藤原頼通



後 三 年 合 戦
侯 池 田 仲 博 藏

大江匡房

平安朝時代の儒者

中納言・太宰帥

天永二年(七七)

薨

年七十一

承暦三年

白河天皇の御代

(七七五)

永保三年

白河天皇の御代

(七四四)

清原武衡

鎮守府將軍武則

の子

家衡

清衡の甥

金澤の柵

秋田縣(羽前國)

仙北郡金澤村に

その址がある

寛治元年

堀河天皇の御代

(七四七)

の第に過り、陸奥の戰事を談ず。博士大江匡房別室に在り、之を聞きて曰く、「好男子惜しむらくは未だ兵法を知らず」と。從者微ほのかに之を聞き、愠りて義家に告ぐ。義家曰く、「それ或は然らん」と。匡房の出づるを見て之に禮し、遂に就いて學ぶ。承暦三年美濃亂る。義家に詔して往いて之を定めしむ。亂人之を聞いて皆遁る。永保三年義家を陸奥守となし、鎮守府將軍を兼ねしむ。時に奥地また亂れ、清原武衡、家衡等兵を擧ぐ。義家自ら出羽に赴き、家衡を攻む。利あらずして還る。武衡喜び、來りて家衡に謂ひて曰く、「子、八幡太郎に克つ、我が曹の榮なり。當に共に力を戮すべし」と。遂に兵を合はせて金澤の柵に據る。義家大いに怒り、寛治元年九

鳥亂るゝものは
鳥起ッハ伏ナ
リ、獸駭クハ覆
ナリ。(孫子、行
軍篇)

義光

頼義の第三子

刑部少輔に累進

した

大治二年(七六七)

卒

先君

父頼義

月自ら數萬騎に將として之を攻む。柵を去ること數里、雁行の亂るゝを望み見て曰く、「これ伏あるなり」と。兵を縦たてちて搜索し、果して獲て之を鑿うにす。衆に謂ひて曰く、「兵法に、『鳥亂るゝものは伏なり。』と言へり。我學ばざりせば殆おぼかりしを」と。遂に進んで柵を圍む。賊勢猖獗未だ下すこと能はず。

義家の弟義光、新羅三郎と稱す。また勇智にして技能多し。この時右兵衛尉たり、京師に在り。兄の軍利あらずと聞き、奏して赴き援けんと請ふ。許されず、官を捨てて之に赴く。義家喜び泣いて曰く、「吾汝を見る、猶先君を見るがごとし」と。乃ち與に俱に進み攻む。勇戰健闘して遂に之を平ぐ。

前後十二年
前九年役と後三
年役

白河法皇

第七十二代

大治四年(二七九)

崩

壽七十七

天仁元年

鳥羽天皇の御代

(二七六)

義家父祖の業を承け、善く將士を撫す。其の奥地を征する、前後十二年、東國の士民皆其の恩信に服し、相共に擁戴して、自ら其の家人と呼び、義家を稱して八幡公と曰ふ。威名朝野に遍し。白河法皇嘗て夢魘を患ひたまひ、義家に詔して其の兵器を獻じて之を鎮めしめたまふ。義家一玄弓を獻じたてまつる。御枕の上に建つるに、即ち患なし。法皇問ひてのたまはく、「東征に執りし所なるか」と。對へて曰く、「臣記せざるなり」と。法皇之を嗟賞したまふ。然れども義家官位甚だ卑し。正四位下右衛門尉を以て、天仁元年に卒す。年六十八。

(日本外史)

清原貞雄

倫理學者

文學博士

廣島文理科大学

教授

明治十八年(二四)

西大分縣生

二八 恵まれた國土

清原貞雄

我が國は昔から豊葦原瑞穂國と呼ばれてゐる通り、地味が肥沃で、五穀が豊に稔り、その上、位置が人類の棲息するに最も適當な緯度に當つてある。随つて春夏秋冬の氣候の變化が適度に行はれ、盛夏と雖も華氏の九十度を超えることは少く、嚴冬と雖もその三十度を下ることは多くない。溫暖な春と爽涼な秋とが比較的長く、春は櫻花をはじめ百花が爛漫として野山を飾り、禽鳥が到る處に聲を合はせて囀る。秋は紅葉の錦が燦爛として山溪に輝き、鳴蟲が千草の中で妙なる音樂を奏でる。その他夏の夕のそゞろあるき、冬の朝の雪の眺もまたなく愉快である。

我が國は海上に點在する島國である。随つて茫茫千里に互る大平原は無い、いづこをはたとわからぬやうな大森林もない。程よい大きさの山や川や平野が到る處にあり、海岸線も概して出入が多く、海上には處々に小島が點在して風情を添へてゐる。げに我が本土の土地は、こゝに住む國民に取つて恐るべき神祕ではなくて、愛すべき自然である。我が國土の誇たる靈峯富士の如きも、雄大莊嚴、これに對する者に



富士と桜

神々しき感をこそ與へるが、畏怖の念は少しも起させないのである。

我が本土は列島の上に國を成してゐる關係上、大陸の一部に居を占めてゐる國々の民が屢、遭遇するやうに、他の強大國から壓迫される機會は古來極めて稀であつた。兇暴なる民族に蹂躪され、掠奪され、親を殺され、妻子を攫はれ、一地又は一國を擧げて焦土にされるといふやうな悲惨な運命に遭遇したことは、上下三千載を通じてたゞの一度も無い。これ固より我が皇室の御稜威によつて國家が常に健全であり、國民が武勇を尙んで、假令我が國を窺ふものがあつても、一擧にこれを撃退することが出来たからでもあるが、一

つには我が國が地理的位置に恵まれてゐたからだともいへよう。

若し我が國がもつと遠い大洋の中に孤立してゐたならばどうであつたらうか。よし他國の侵略は免れることが出來たとしても、文化の進歩は望むことが出來なかつたであらう。然るに我が國は、他國の文化と全くかけ離れるほど遠く孤立してはゐない。のみならず、海上の交通が夙に發達した結果、古來大陸との交渉も絶えず行はれ、爲に大陸に發達した文化は悉くこれを輸入し吸収してその進歩に資することが出來た。かくて我が國は遂に東洋文化の綜合者大成者たる光榮をさへも擔ふに至つたのである。

神國

大日本は神國なり天祖始めて基を開き日神長く統を傳へ給ふ我が國のみこの事あり異朝にはその類なしこの故に神國といふなり(北畠親房、神皇正統記)

まことに我が敷島の大和國は、最も恵まれた國土である。

我が國は神の深き思召によつて作られ守られてゐる國であるといふ自信、即ち謂はゆる「神國」であるといふ信念を我が國民が古くから抱いてゐるのは、決して理由のないことではない。たゞ今日に於て、人口過剩の結果、國土の狹隘を感じ、物資の不足を告ぐるに至つたのは、國家として大いに考へなければならぬことである。今後の我が國民は、積極的には農産物の增收並に工業の發達を圖り、且海外貿易の發展を企て、消極的には正しき節約を行ひ、無益の費を省くことによつて物資の不足を補ひ、以て折角恵まれた自然の樂土を擁護し、ますますその樂土たる特質を發揮せしむ

昭和	大	大	大	大	明	明	明	明	明	明	明
正	正	正	正	治	治	治	治	治	治	治	治
四	四	四	四	四	四	四	四	三	三	三	三
九	六	四	三	元	十	十	十	十	十	十	十
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
十	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
月	三	五	八	三	六	三	六	三	六	三	六
十	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
八	修	修	修	修	修	修	修	修	修	修	修
日	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
修	十	九	八	七	六	五	四	三	再		
正	版	版	版	版	版	版	版	版	版	版	版
二	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發
十	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行
三	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
版	九	六	六	五	四	二	一	七			
發	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
行	八	二	八	一	九	二	十	一	一		
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
八	十	二	六	八	八	八	八	八	五		
日	四	三	十	日	日	日	日	日	日	日	日
修	修	修	修	修	修	修	修	修	修	修	修
正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
廿	廿	二	十	十	十	十	十	十	十	十	十
二	二	一	九	八	七	六	五	四	三	二	一
版	版	版	版	版	版	版	版	版	版	版	版
發	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發	發
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行



本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接に御注文被下候はば直に御送本可致候

編者 吉田彌平 東京市小石川區高田老松町五十二番地
 發行者 上原才一郎 東京市神田區神保町一丁目五番地
 發行所 光風館書店 (電話 神田三〇八七番) (振替口座東京三二七番)
 印刷者 根本力三 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

定價 各金六十錢

才學年三組岸岡義明

中國文教科書 卷一終

あめの下
 本居宣長の歌
 るやうに努めねばならぬ。
 あめのした國はおほけどかむろぎのうみなしませる
 大八洲國
 (報日出る國)

